

BigFix
WebUI 管理者ガイド



Special notice

Before using this information and the product it supports, read the information in [Notices \(on page lxix\)](#).

Edition notice

This edition applies to BigFix version 10 and to all subsequent releases and modifications until otherwise indicated in new editions.

目次

第 1 章. 概要	6
WebUI の対象者.....	6
第 2 章. デプロイメント要件	7
ハードウェア要件.....	8
ネットワーク・ポートの競合.....	9
第 3 章. WebUI のインストール	11
インストール手順.....	11
DB スキーマ・アップグレード手順.....	15
ポートの変更.....	16
SSL 証明書の構成.....	16
WebUI 証明書の取り消し.....	19
通知の送信.....	19
WebUI へのアクセス.....	19
第 4 章. WebUI サービスの削除	20
第 5 章. ユーザーのプロビジョニング	21
BigFix コンソールに設定された権限.....	21
特定のアプリケーションに関する注記.....	25
WebUI 権限サービス.....	27
第 6 章. アプリケーション更新の管理	30
第 7 章. ダッシュボードの編集	34
共通の編集手法.....	35
事前定義されたタイルの操作.....	36
カスタム・タイルの操作.....	40
主要数値タイルの作成.....	45
要約タイルの作成.....	46
リスト・タイルの作成.....	48
チェック・タイルの作成.....	49
グラフ・タイルの作成.....	50
第 8 章. パフォーマンス	52
オペレーターのパフォーマンス.....	52

環境のアップグレード.....	53
データベース管理.....	53
キャッシング.....	53
第 9 章. ログの場所.....	55
第 10 章. WebUI サーバー設定.....	56
WebUI サーバー設定へのアクセス.....	56
サーバー設定の定義.....	56
第 11 章. SAML 2.0.....	61
第 12 章. トラブルシューティング.....	63
第 13 章. WebUI および分散サーバー・アーキテクチャー (DSA).....	65
第 14 章. サポートされるパッチ・サイト.....	67
付録 A. Support.....	68
Notices.....	lxix

第1章. 概要

本書は、BigFix マスター・オペレーターと BigFix デプロイメントの管理者を対象としています。WebUI の使用方法に関する情報については、「[BigFix WebUI ユーザーズ・ガイド \(\(ページ\) \)](#)」を参照してください。

WebUI は、BigFix の柔軟性と機能を活用しています。WebUI は BigFix コンソールを補うものであり、これを置き換えるわけではありません。多くの WebUI 管理タスクは、BigFix コンソールを使用して行います。

WebUI の対象者

WebUI は BigFix のデプロイメントすべてに適しているとは限らず、現在は従来の BigFix デプロイメントほど拡張性が高くありません。WebUI には現在以下の使用上限があります。

- Microsoft Windows
 - 250,000 管理対象エンドポイント
 - 36 同時ユーザー
- Red Hat Enterprise Linux
 - 250,000 管理対象エンドポイント
 - 36 同時ユーザー

大規模デプロイメントで WebUI を使用できない理由は特にありませんが、パフォーマンスに大きな影響を与える可能性があります。詳しくは、『[パフォーマンス \(\(ページ\) 52\)](#)』を参照してください。

第2章. デプロイメント要件

このガイドには、BigFix プラットフォーム V10.0.0 以降に WebUI をインストールするための情報および手順が記載されています。WebUI は BigFix プラットフォーム V10.0.0 以降のバージョンでサポートされています。

WebUI をデプロイする前に環境を準備します。

WebUI サービスをインストールする前に、以下のことを確認します。

- BigFix プラットフォーム V10.0.0 以降をインストールします。手順は、『BigFix プラットフォーム・インストール・ガイド ([ページ](#))』を参照してください。
- BigFix clientを同じコンピューターにインストールします。
- BigFix Web レポートがインストール済みで実行中であり、REST API を介してアクセス可能である必要があります。前提条件が満たされない場合、WebUI は照会やプロファイルなどの一部の WebUI サイトおよびアプリケーションを読み込むことができず、通知の送信などのパッチ・ポリシーやサービスは利用できません。BigFix Web レポートがリモート・サーバーにインストールされていて、WebUI の起動後にデータ・ソースが構成されていても、WebUI サーバーが再起動されるまでこれらのアプリケーションは使用できません。
- WebUI のインストールに使用されるデータベース・ユーザーに対して DBA が以下の権限を付与していることを確認します。
 - BFENT (DB2)、BFEnterprise (MS SQL Server) 内のすべての DBO テーブルに対する読み取りアクセス権限。
 - ストアド・プロシージャを作成する権限。
 - WebUI 名前空間に新しい索引を作成する権限。
 - WebUI 名前空間に新しいテーブルを作成する権限。
- 「通知の送信」サービスを使用するための要件は以下のとおりです。
 - BigFix Web レポートがインストール済みで実行中であり、REST API を介してアクセス可能である必要があります。
 - 通知サービスがリモート・マシンではなく BigFix ルート・サーバーにインストール済みである必要があります。
- WebUI サービスをリモート・サーバーにインストールする場合は、以下のことを確認します。
 - インストール用の Fixlet をデプロイする前に、リモート・サーバー上で BigFix エージェント・バージョン 10.0.0 以降が実行されている必要があります。
 - BigFix ルート・サーバーと WebUI リモート・サーバーは、同じオペレーティング・システム (Windows または Red Hat) で実行する必要があります (オペレーティング・システムのバージョンは異なる場合あり)。サポートされるオペレーティング・システムは、次のとおりです。
 - Windows Server 2012 R2/Windows Server 2016/Windows Server 2019
 - Red Hat Linux 7/8 (64 bit)
- WebUI を使用するには HTTP Cookie を有効にしておく必要があります。ブラウザの Cookie が無効化またはブロックされているユーザーは、ログインできません。警告メッセージもエラー・メッセージも表示されません。
- WebUI 通信用にネットワーク・ポートをオープンにする必要があります。デフォルト・ポートは 80 (HTTP) および 443 (HTTPS) です。詳しくは、『[ネットワーク・ポートの競合 \(\[ページ\]\(#\) 9\)](#)』を参照してください。

- 認証局 (CA) 署名済みの SSL 証明書により、WebUI デプロイメントとのセキュア通信が確保されます。詳しくは、『[SSL 証明書の構成 \(ページ 16\)](#)』を参照してください。
- WebUI へのアクセスには、以下のサポートされているインターネット・ブラウザを使用します。1024x768 以上の画面解像度が必要です。
 - Microsoft Edge (最新バージョンに更新されたもの)
 - Firefox (最新バージョンに更新されたもの)
 - Safari (最新バージョンに更新されたもの)
 - Chrome (最新バージョンに更新されたもの)

BigFix Query を使用するためのシステム要件は以下のとおりです。

- BigFix バージョン 10.0.0 以降。
- ご使用の環境で Web レポートが有効になっている。
- BigFix Lifecycle または BigFix Security and Compliance のライセンス。
- BigFix Query の要求を処理するには、対象クライアントに以下が備わっている必要があります。
 - UDP 通知を受信できる。
 - BigFix V10.0.0 以降がインストールされている。
- すべての対象クライアントと中間リレーに BigFix V10.0.0 以降がインストールされている必要がある。

BigFix IVR を使用するためのシステム要件は以下のとおりです。

- IVR スキーマが設定されている
- IVR データ・フローが実行されており (IVR 1.4) Insights に相関するデータが存在する
- Insights ETL が実行されている
- デフォルトでは、WebUI IVR アプリはポート 52318 を listen します。これは、WebUI アプリケーション構成ファイルで `_WebUIAppEnv_INSIGHT_BROKER_PORT` 設定を使用して変更できます。

ハードウェア要件

WebUI を稼働させるには、追加のハードウェア・リソースが必要となります。BigFix デプロイメントのベースライン・ハードウェア要件は、『[BigFix インストール・ガイド](#)』に記述されています。

WebUI の処理能力計画は、エンドポイントの数、作業負荷、時刻、サーバーの場所、同時ユーザー数などの多くの要素によって異なります。WebUI のパフォーマンスを向上するベスト・プラクティスと推奨事項は、『[BigFix キャパシティー・プランニング・ガイド](#)』を参照してください。データベース・サーバー、オペレーティング・システム、ハイパーバイザーの構成に関する推奨事項が記載されています。

表 1. WebUI ハードウェアの推奨事項

コン	追加	追加	
ポー	CPU	メモ	追加ストレージ (GB)
ネン		リー	
ト		(GB)	

表 1. WebUI ハードウェアの推奨事項 (続く)

BigFix	10	10			BigFix データベースの 15%
WebUI	同時	同時			
	ユー	ユー			
	ザー	ザー			
	ご	ご			
	とに	とに			
	+2	+2			

BigFix プラットフォーム V10 以降では、WebUI の応答時間を改善するために、いくつかのカウンターにデータベースのキャッシュが実装されました。時間に基づくキャッシュの場合、デフォルトの更新間隔は 10 分です。

WebUI サーバーについて詳しくは、『[BigFix キャパシティ・プランニング・ガイド](#)』を参照してください。

BigFix WebUI では、拡張性があり、応答性の高い管理インターフェースが提供されます。WebUI サーバーと同じ点が数多くあります。以前のバージョンを使用している場合は、最新バージョンへのアップグレードを強くお勧めします。大幅な改善が行われ、スケール、機能、ユーザー・エクスペリエンスが向上しました。

- ハードウェアの推奨事項は、BigFix ルート・サーバーの要件に追加されました。
- Anti-Collocated なインスタンス (ルート・サーバー上にデプロイされないインスタンス) がデプロイされている場合、データベース・サーバーと WebUI サーバーにまたがって CPU 要件を分け、データベース・サーバーにストレージを追加する必要があります。
- 推奨されるスケーラビリティの制限については、Windows、Linux の WebUI インスタンスとも、250k デプロイメント・ベースで 36 同時ユーザーをサポートします。繰り返しになりますが、これらは以前に提供されたキャパシティ・プランニング定義ごとの非常にアクティブな同時ユーザーを指します。
- 同時ユーザーは、通常、資産のサブセットを管理する、マスター以外のオペレーターです。
- ユーザー操作、インフラストラクチャー機能などに基づいて、より大きな規模で管理することが可能です。しかしながら、上で述べた範囲は、ソリューションの規模に対する“大まかな目安”として考慮してください。

ネットワーク・ポートの競合

BigFix WebUI は、ネットワーク・ポート 80 (HTTP) と 443 (HTTPS) で通信するように初期設定されています。WebUI は、さらに 2 つのポート (5000 と 5001) を使用します (80 および 443 に加えて)。

これらのポートは WebUI の有効化の際に任意の値に設定できます。選択したポートがオープンのまま維持され、他のアプリケーションで使用されないことがきわめて重要です。WebUI ログイン時に WebUI が HTTP から HTTPS にリダイレクトできないなど、WebUI の通常と異なる動作に気付いた場合、ポートの競合がないか確認してください。実行中のサービスを確認するには netstat コマンドを使用します。

- Linux: `netstat -l`
- Windows: `netstat -an`

競合が見つかった場合、問題に対処する方法がいくつかあります。

- WebUI が稼働する場所を変更するマシン上の重要な WebUI サービスのネットワーク・ポートを調整するクライアント設定は以下のとおりです。
 - _WebUI_HTTPS_Port (デフォルト: 443)
 - _WebUI_Redirect_Port (デフォルト: 80)
 - _WebUIAppEnv_APP_PORT (デフォルト: 5000)
 - _WebUIAppEnv_APP_PORT_MIN (デフォルト 5002)
 - _WebUIAppEnv_APP_PORT_MAX (デフォルト 5999)
- 競合が発生しているネットワーク・サービスを停止します。競合するサービスの例を以下に示します。
 - SQL Server Reporting Services (ReportServer)
 - Web Deployment Agent Service (MsDepSvc)
 - BranchCache (PeerDistSvc)
 - Sync Share Service (SyncShareSvc)
 - World Wide Web Publishing Service (W3SVC)
 - Internet Information Server (WAS、IISADMIN)
 - SolarWinds Agent
 - Nutanix Guest

WebUI サーバーの設定について詳しくは、『[サーバー設定の定義 \(ページ 56\)](#)』を参照してください。

WebUI と Web レポートの競合

WebUI と BigFix Web レポートの間で競合が発生することがあります。バージョン 9.2.4 以前のプラットフォームでは、Web レポートはデフォルトでポート 80 に設定されています。プラットフォーム V9.2.5 以降、Web レポートは、WebUI との競合を回避するために、デフォルトでポート 8080 になりました。既存デプロイメントを 9.2.5 以降にアップグレードするときに、Web レポートで使用されるポートは変更されません。そのため、完全に更新されたデプロイメントを実行できても、依然としてポートの競合が発生する可能性があります。

WebUI のインストール時に、Web レポートとのポート競合が検出され、Web レポートのポートを変更するオプションが提供されます。詳しくは、『[通信ポートの変更 \(ページ \)](#)』を参照してください。

第3章. WebUI のインストール

BigFix プラットフォーム・バージョン 10 以降で WebUI をインストールまたはアップグレードするには、以下の手順を実行します。この手順を開始する前に、以下を実行します。

- WebUI の [デプロイメント \(ページ 7\)](#) および [ハードウェア \(ページ 8\)](#) の要件を確認し、使用する環境の準備が整っていることを確認します。
- V10 以降の BigFix プラットフォームのインストールを完了してください。詳しくは、「[BigFix インストール・ガイド](#)」を参照してください。

それぞれの環境に適したオプションを選択してください。

- [WebUI のインストール \(ページ 11\)](#) 手順を使用して、WebUI の初回インストールを行います。
- [DB スキーマ・アップグレード \(ページ 15\)](#) 手順を使用して、既存の WebUI インストール済み環境で Microsoft SQL Server (Windows システム) または IBM DB2 (Red Hat Enterprise Linux (RHEL) システム) を有効化します。

WebUI を SAML 専用モードで使用するには、『[SAML 2.0 \(ページ 61\)](#)』を参照してください。

インストール手順

BigFix プラットフォーム・バージョン 10 以降に WebUI をインストールするには、以下の手順を実行します。

WebUI インストール用の Fixlet では、Windows システムの場合は SQL Server、Red Hat Enterprise Linux システムの場合は DB2 にデフォルトで設定されます。



注: このタスクは WebUI サービスのみをインストールし、その後、WebUI の残りの部分を自動的にインストールして構成します。このタスクが完了したら、WebUI サービスがインストール後の操作を完了するまで待ってから、実際に WebUI を使用する必要があります。

始める前に:

- WebUI の [デプロイメント \(ページ 7\)](#) および [ハードウェア \(ページ 8\)](#) の要件を確認し、使用する環境の準備が整っていることを確認します。例えば、データベース・アカウント権限が正しくない場合、WebUI は正常に開始しません。
 - V10 の BigFix プラットフォームのインストールを完了してください。詳しくは、「[BigFix インストール・ガイド](#)」を参照してください。
1. BES サポート・サイトで、ルート・サーバーのバージョンに関連する Fixlet 「Install BigFix WebUIService」を見つけます。例えば、プラットフォームのバージョン 10 を実行している場合、Fixlet 「**Install BigFix WebUI Service (Version 10)**」を使用します。
 2. WebUI をインストールするサーバーのホスト名または IP アドレスを用意しておきます。

- WebUI のデフォルトのインストール・ディレクトリーは、以下のとおりです。
 - Windows システムの場合:

```
C:\Program Files (x86)\BigFix Enterprise\BES WebUI
```

- RHEL システムの場合:

```
/var/opt/BESWebUI and /opt/BESWebUI
```

3. デフォルトを使用しない場合は、WebUI のターゲット・ドライブとディレクトリーを用意しておきます。
 - Windows システムでは、指定したターゲットが自動的に作成されます。
 - Red Hat Linux システムでは、以下の手順を実行します。
 - a. ターゲット・ディレクトリーを作成します。
 - b. デフォルトのディレクトリーからターゲット・ディレクトリーにシンボリック・リンクを作成します。
4. WebUI は BigFix サーバー・データベースに直接接続する必要があります。BigFix サーバーがリモート・データベースを使用している場合、WebUI はそのデータベースにも接続します。頻繁にデータベースの資格情報を変更すると、WebUI の初期化に失敗する可能性があります。WebUI データベースへのアクセスに使用するアカウントは、専用にする必要があります。



注: WebUI インストール後にアカウントのパスワードを変更する場合は、Fixlet 「Deploy/Update WebUI Database Configuration」を実行します。この同じ Fixlet を使って、資格情報に起因する初期化の問題も修正できます。

5. SQL Server を使用している場合は、次の手順を実行します。
 - 「データベース認証タイプの指定」フィールドで適切な値を選択します。
 - Windows 認証を選択した場合は、「データベース・ユーザー名の指定」フィールドに、DOMAIN \username の形式でユーザー名を入力します。ここで DOMAIN は NetBIOS ドメイン名である必要があります。
 - SQL Server 認証を選択した場合は、SQL 資格情報を使用して、「データベース・ユーザー名の指定」フィールドに、プレーンな SQL Server ユーザー名を入力します。デフォルトは sa です。
 - 「BigFix サーバー・データベース・ホストの指定」で、BigFix サーバーのデータベースをホストするコンピューターのホスト名または IP を入力します。このホスト名は DNS 解決が可能なものでなければなりません。
 - 「SQL Server の名前付きインスタンスの指定」フィールドまたは「データベース・ポートの指定」フィールドのいずれかを使用できます。編集する場合は、1 つを選択します。デフォルトのデータベース・インスタンスを使用するには、そのポートを入力します。デフォルトは 1433 です。名前付きデータベース・インスタンスを使用するには、その名前を入力します (SQLEXPRESS など)。
 - 名前付きデータベース・インスタンスに接続することを選択した場合は、「SQL Server の名前付きインスタンスの指定」フィールドにインスタンス名を入力します。
6. IBM DB2 を使用している場合は、次の手順を実行します。
 - ターゲット・データベース・コンピューターで、DB2 構成パラメーター extended_row_sz が ENABLED に設定されていることを確認します。DB2 10.5 以降、このパラメーターは、デフォルトで有効になっています。ただし、DB2 がバージョン 10.1 以前からアップグレードされている場

合は、DISABLED に設定されている場合があります。このパラメーターは手動で変更できます。これはすべての Linux サーバーのインストールで ENABLED に設定する必要があります。そうしないと、WebUI を正常に起動できません。

- Fixlet で、DB2 データベースのユーザー名とパスワードを指定します。
 - 「BigFix サーバー・データベース・ホストの指定」で、BigFix サーバーのデータベースをホストするコンピューターのホスト名または IP を入力します。このホスト名は DNS 解決が可能なものでなければなりません。
 - 「データベース・ポートの指定」フィールドに DB2 データベース・ポートを入力します。
7. 以下のポートが使用可能で許可されていることを確認します。
- デフォルトの HTTP リダイレクト・ポートは 80 です。
 - デフォルトの HTTPS ポートは 443 です。
 - SAML 2.0 を使用している場合、Web レポート・サーバーと BigFix のメイン・サーバーが WebUI サーバーのポート 5000 に接続可能である必要があります。詳しくは、『SAML 2.0 と統合するように BigFix を構成する方法 ((ページ))』を参照してください。
 - 内部的には、WebUI はポート 5001 も使用します。WebUI サーバーで使用可能であることを確認してください。



注: WebUI が別のマシンにインストールされている場合、BigFix のメイン・サーバーの WebUI ポートも許可されていることを確認してください。WebUI ポートの値は、「サーバー・ポート番号 + 4」と計算されています。サーバー・ポート番号はインストール中に BigFix 管理者による設定が可能で、デフォルト値は 52311 です。したがって、WebUI ポートのデフォルト値は 52315 です。サーバーのポート番号について詳しくは、『ステップ 2 - ライセンス証明書の要求とマストヘッドの作成 ((ページ))』と『マストヘッド・パラメーターのカスタマイズ ((ページ))』(Windows または Linux での root サーバーのインストール) を参照してください。

8. WebUI をリモート・サーバーにインストールし、WebUI が SAML と一緒に動作するように構成するには、BigFix server コンピューターの `_WebUI_AppServer_Hostname` キーを WebUI のインストール先コンピューターのホスト名に設定する必要があります。
9. Fixlet をデプロイします。

Task: Install BigFix WebUI Service (Version 10.0.0)

Take Action | Edit | Copy | Export | Hide Locally | Hide Globally | Remove

Description | Details | Applicable Computers (8) | Action History (0)

Description

Deploy this Fixlet on a device to install the BigFix WebUI Service.

This Fixlet will:

- Install and start a service (Windows) or background process (Linux)
- Establish a secure connection with the BigFix Server
- Set relevant client settings
- Send the database connection configuration to the WebUI server
- Encrypt the database credentials
- Store the configuration within the WebUI folder
- Extract and run the WebUI service

Deployment configuration

Specify WebUI HTTPS Port:

Specify WebUI HTTP Redirect Port:

Specify Hostname or IP of Target Endpoint:

Custom WebUI Installation Directory (Optional):

Database configuration

Specify Database Authentication Type: SQL Server Authentication
 Windows Authentication

Specify Database Username:

Specify Database Password:

Confirm Database Password:

Specify BigFix Server Database Host (see below):

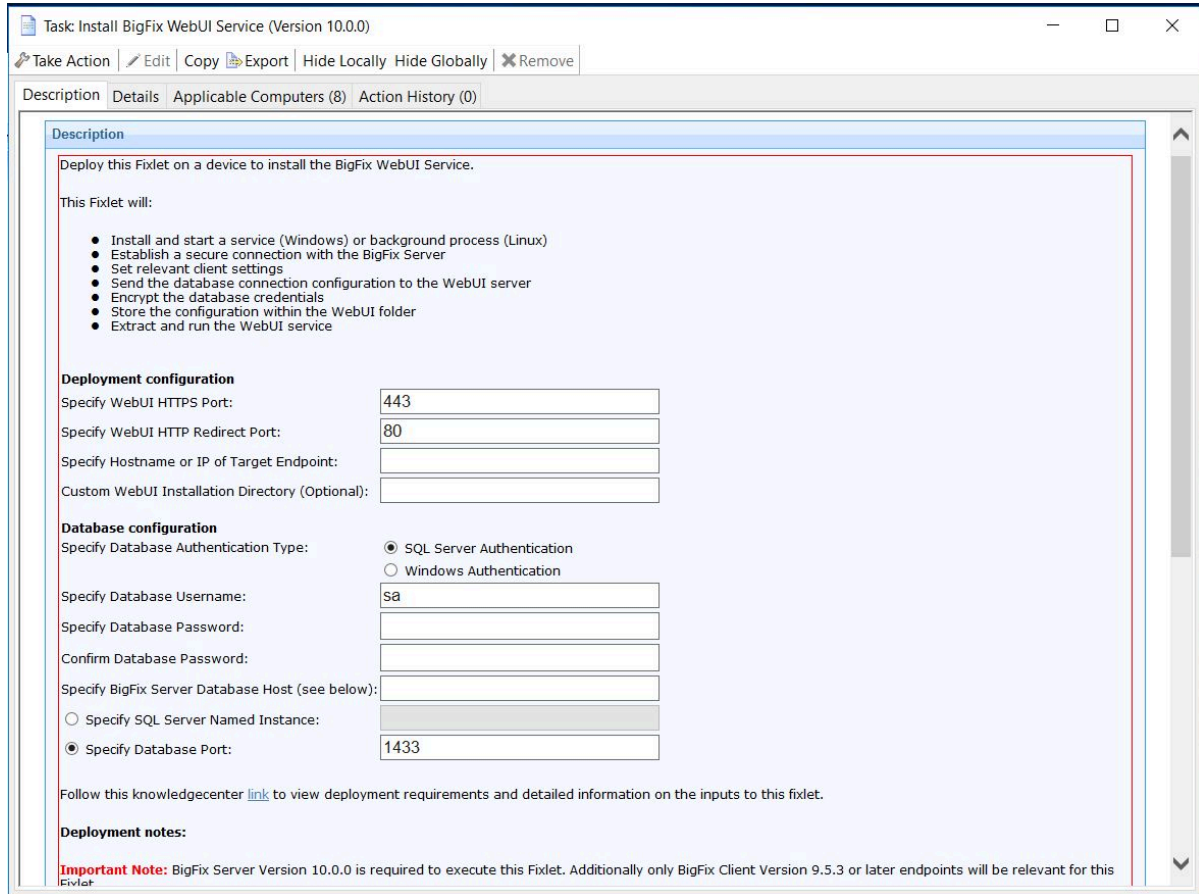
Specify SQL Server Named Instance:

Specify Database Port:

Follow this knowledgecenter [link](#) to view deployment requirements and detailed information on the inputs to this fixlet.

Deployment notes:

Important Note: BigFix Server Version 10.0.0 is required to execute this Fixlet. Additionally only BigFix Client Version 9.5.3 or later endpoints will be relevant for this Fixlet.



インストール後の注:

- Fixlet が失敗した場合は、Fixlet が生成してターゲット・マシンに送信した証明書を取り消してください。
- MSSQL サーバーに対して暗号化を有効にした場合は、リモート WebUI サーバーにクライアント設定 `_WebUIAppEnv_MSSQL_CXN_ENCRYPT = 1` を適用する必要があります。
- WebUI を Linux マシンにインストールしている場合、ローカライズされたメッセージをすべて正しく、WebUI がインストールされたマシンに表示するには、クライアント設定 `_WebUIAppEnv_LANG` ([ページ 59](#))を作成し、優先言語を、例えば日本語の場合は、「**ja_JP.UTF-8**」と設定します。
- Fixlet が成功した場合は、ルート・サーバーと WebUI の間で通信できるように、ルート・サーバー上の WebUI ポートが使用されます。2 台のマシン間のすべてのネットワーク・ファイアウォールでも WebUI ポートの使用が許可されている必要があります。
- リモート・マシン上で WebUI プロセスを開始、停止、および再開するには、Windows では `services.msc`、Red Hat Linux では端末を使用します。WebUI プロセスが停止している場合は、Fixlet **2562 - BES WebUI Service not Started** を使用して WebUI を開始することもできます。

DB スキーマ・アップグレード手順

BigFix プラットフォーム・バージョン 10 以降の DB スキーマ・アップグレード手順を使用して、Microsoft SQL Server または IBM DB2 で WebUI を使用するために既存の WebUI インストール済み環境をアップグレードします。

インストール後に WebUI サービスを開始するまでに、十分な時間を見越しておいてください。WebUI を使用するには、索引の構築およびその他のプロセスを完了する必要があります。

始める前に:

- WebUI の [デプロイメント \(\(ページ\) 7\)](#) および [ハードウェア \(\(ページ\) 8\)](#) の要件を確認し、使用する環境の準備が整っていることを確認します。例えば、データベース・アカウント権限が正しくない場合、WebUI は正常に開始しません。
- V10 以降の BigFix プラットフォームのインストール (WebUI サービスを含む) を完了してください。詳しくは、「[BigFix インストール・ガイド](#)」を参照してください。

DB スキーマ・アップグレード手順

データベース・スキーマ更新 Fixlet をデプロイする前に、すべての WebUI アプリケーションについて保留している遅延アップデートがないことを確認してください。サイトが最新でない場合、Fixlet は適用されません。エラー・ギャップ・デプロイメント環境や、遅延更新機能を使用するお客様にとって、これは非常に重要です。

1. BES サポート・サイトで、Fixlet 「**Deploy/Update WebUI Database Configuration**」を見つけて実行します。

ポートの変更

Fixlet 「**Change Ports for WebUI Service and Web Reports**」を使用して、通信ポートを変更します。

BigFix プラットフォーム V10 以降では、BES サポート・サイトの Fixlet 「**Change Ports for WebUI Service and Web Reports**」を使用して、BigFix server またはリモート・マシン上のいずれかの通信ポートを変更します。この Fixlet の説明を使用して、使用するポート番号を入力します。

SSL 証明書の構成

Secure Sockets Layer (SSL) 証明書により、BigFix WebUI サーバーと、サーバーにアクセスするすべてのユーザーの間のセキュア通信が可能になります。BigFix WebUI 用の SSL 証明書を構成するには、この手順を使用します。

自己署名 SSL 証明書の使用

WebUI は、BigFix Platform によって生成された自己署名証明書を使用します。これらの自己署名証明書は、(対応する CA 証明書がエンドポイントのトラステッド証明書ストアに追加されない限り) Web ブラウザーにより信頼されません。この設定で実行しているユーザーはこの画面が表示されても、次のメッセージを無視して安全にクリックして移動できます:



Your connection is not private

Attackers might be trying to steal your information from **webuidemo.westus2.cloudapp.azure.com** (for example, passwords, messages, or credit cards). [Learn more](#)

NET::ERR_CERT_AUTHORITY_INVALID

Help improve Safe Browsing by sending some [system information and page content](#) to Google.
[Privacy policy](#)

ADVANCED

Back to safety

Verisign、Entrust、ZeroSSL などの認証局 (CA) によって正式に署名された SSL 証明書を購入することを検討してください。外部の CA を使用する場合、既知の公開 CA のルート証明書は、最新の Web ブラウザーにデフォルトでインポートされているという利点があります。

信頼された認証局からの SSL 証明書の使用

信頼された認証局 (CA) からの証明書を BigFix WebUI デプロイメントで使用するように設定します。CA 署名済み証明書のプライベート・キーおよび証明書署名要求 (CSR) を生成するとき、プライベート・キーおよび証明書ファイルが以下の形式および構造を持っていることを確認します。

プライベート・キーのフォーマット

PEM エンコード形式で、パスワード保護機能なし。pvk フォーマットはサポートされていません。プライベート・キー (*private.key*) が以下の文で囲まれていることを確認します。

```
-----BEGIN PRIVATE KEY-----
<<base64 string from private.key>>
-----END PRIVATE KEY-----
```

X509 証明書のフォーマット

PEM エンコード形式。中間証明書とルート証明書を別々のファイルとして受け取った場合、これらすべてを 1 つのファイルに結合する必要があります。例えば、プライマリー証明書ファイル (*certificate.crt*) および中間証明書ファイル (*ca_intermediate.crt*) がある場合、以下に示すように最初にプライマリー証明書、次に中間証明書という順序でこれらを結合する必要があります。

```
-----BEGIN CERTIFICATE-----
<<primary certificate: base64 string from certificate.crt>>
-----END CERTIFICATE-----
-----BEGIN CERTIFICATE-----
<<intermediate certificate: base64 string from ca_intermediate.crt>>
-----END CERTIFICATE-----
```

中間証明書のほかにルート証明書 (*ca_root.crt*) も受け取った場合は、これらを以下のように結合します。

```

-----BEGIN CERTIFICATE-----
<<primary certificate: base64 string from certificate.crt>>
-----END CERTIFICATE-----

-----BEGIN CERTIFICATE-----
<<intermediate certificate: base64 string from ca_intermediate.crt>>
-----END CERTIFICATE-----

-----BEGIN CERTIFICATE-----
<<root certificate: base64 stringfrom ca_root.crt>>
-----END CERTIFICATE-----

```

SSL 証明書のデプロイ

SSL 証明書を BigFix WebUI サーバーにデプロイする方法:

1. SSL プライベート・キーの名前を `ssl.pvk` に変更します。
2. SSL 証明書の名前を `ssl.crt` に変更します。
3. 両方のファイルを WebUI サーバーの以下の場所にコピーします。

表 2. 証明書およびプライベート・キーを保管するための WebUI サーバー・ディレクトリー

オペレーティング・システム	WebUI サーバー	WebUI サーバー・ディレクトリー
Windows	BigFix ルート・サーバー	<code>C:\Program Files (x86)\BigFix Enterprise\BES Server\WebUI</code>
	リモート・サーバー	<code>C:\Program Files (x86)\BigFix Enterprise\BES WebUI\WebUI</code>
Linux	BigFix ルート・サーバー	<code>/var/opt/BES Server/WebUI</code>
	リモート・サーバー	<code>/var/opt/BESWebUI/WebUI</code>

4. WebUI マシンで、次のクライアント設定が追加されていることと、それらの値が手順 3 で指定したパスになっていることを確認します。
 - `_WebUIAppEnv_WEB_CERT_FILE`
 - `_WebUIAppEnv_WEB_KEY_FILE`

例: WebUI ディレクトリーが `C:\Program Files (x86)\BigFix Enterprise\BES WebUI` の場合:

- `WEB_CERT_FILE` の値は `C:\Program Files (x86)\BigFix Enterprise\BES WebUI\ssl.crt`。
- `WEB_KEY_FILE` の値は `C:\Program Files (x86)\BigFix Enterprise\BES WebUI\ssl.pvk`。

5. BES FillDB サービスを再起動します。

WebUI 証明書の取り消し

証明書が漏えいした場合や意図した目的に対して有効でなくなった場合には、証明書を取り消す必要があります。

証明書を取り消すには、ルート・サーバーで BESAdmin ツールを使用します。

• Windows デプロイメント

```
BESAdmin.exe /revokewebuicredentials /sitePvkLocation:<pvklocation>
/sitePvkPassword:<pvkpassword> /hostname:<hostname>
```

• Linux デプロイメント

```
./BESAdmin.sh -revokewebuicredentials -hostname=<hostname_of_the_instance>
-sitePvkLocation=<pvk_loc> -sitePvkPassword=<pvk_password>
```

BESAdmin ツールの詳細については、次の資料を参照してください。『[追加の管理コマンド](#)』

通知の送信

BigFix の「通知の送信」サービスを使用して、デプロイメントがすべてのデバイスで完了した場合、または指定した数のデバイスで失敗した場合に、Eメール・アラートをトリガーできます。「通知の送信」サービスを使用するための要件は以下のとおりです。

- オペレーターの「**カスタム・コンテンツ**」権限が“「はい」”に設定されている必要があります。
- オペレーターの「**アクションの作成が可能**」権限が“「はい」”に設定されている必要があります。
- BigFix Web レポートがインストール済みで実行中であり、REST API を介してアクセス可能である必要があります。

Eメール通知サービスの有効化について詳しくは、「[BigFix 構成ガイド](#)」を参照してください。アクセス権について詳しくは、WebUI での権限の効果 ([ページ](#)) を参照してください。

WebUI へのアクセス

このセクションでは、WebUI インターフェースにアクセスする方法を説明します。

Web ブラウザーから WebUI にアクセスするには、以下にナビゲートします。

```
<http_or_https>://<IP_or_FQDN>:<port_if_not_80/443>
```

デプロイメントのサイズに応じて、WebUI インデックスの作成には 1 ~ 2 時間、大規模なデプロイメントの場合は最長で 12 ~ 16 時間かかることがあります。インデックスの作成中は WebUI を使用できません。

第 4 章. WebUI サービスの削除

BigFix プラットフォームから WebUI を削除するには、以下の手順を実行します。

1. 「**Fixlet 2557 - Remove WebUI Service**」を実行して、WebUI を BigFix サーバーまたはリモート・マシンから削除します。サーバー・インスタンス (クライアント設定、ETL ディレクトリー、および WebUI の作業ディレクトリーを含む) が削除されます。



注: WebUI の移動または再インストールの必要がある場合、次の手順は必須ではありません。手順 2 で説明されているアクションは、BigFix サーバー・データベースにクリーンアップを実行する場合、または WebUI を再インストールしない場合にのみ実行します。

2. ご使用のデータベース・プラットフォーム用の SQL 文を、[「BES WebUI DB Cleaner」](#) ページからコピーし、BFENT データベース・サーバーで実行します。このタスクを実行するには、BFENT へのアクセス権限と SQL の実行権限が必要です。例えば、SQL Server ユーザーの場合は SA レベル、DB2 ユーザーの場合は DB2inst1 レベルまたは dbadmin レベルです。

第 5 章. ユーザーのプロビジョニング

WebUI と WebUI の機能に対するアクセスを制御するには、WebUI と BigFix コンソールの権限設定を使用します。

次の場合はコンソールの権限設定を使用します。

- サイト、デバイス、オペレーター、および役割の権限を設定する
- 「**WebUI アプリケーション**」メニューでオペレーターに表示されるアプリケーションを制御する
- 個々のオペレーターまたは役割の「**WebUI ログイン**」ページに対するアクセス権限を無効にする

次の場合は WebUI の権限サービスを使用します。

- コンテンツの対象の上限を設定して、オペレーターがデプロイできるコンテンツ量を制限する
- 対象デバイスの上限を設定して、オペレーターがデプロイできるコンテンツ先または照会対象を制限する
- 個々の役割に無制限の対象指定権限を付与する

マスター・オペレーターは WebUI のすべてのエレメント、機能、コントロールに対するフル・アクセス権限を常に持っています。マスター・オペレーター専用の WebUI アプリケーション (権限サービスなど) は、一般のオペレーターの画面には表示されません。デプロイメント情報へのアクセス権限は、WebUI オペレーター全員に付与されます。例えば、オペレーターは、パッチを適用する権限を持っているかどうかに関係なく、エンドポイントにデプロイされたパッチすべてのリストを表示できます。この情報を表示できることは、進行中のデプロイメントの停止といった、その情報を操作する権限があることを意味するわけではありません。

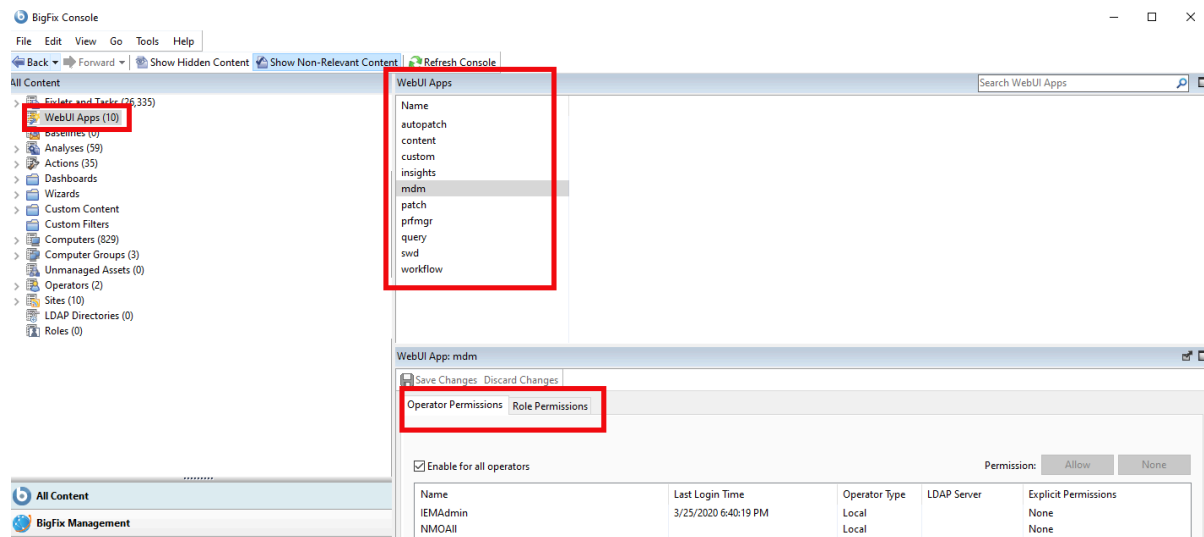
WebUI 権限を設定する手順は、以下に示すとおりです。BigFix 権限について詳細は、[「BigFix サイト管理者およびコンソール・オペレーター」](#)を参照してください。オペレーターと役割の管理については、[「BigFix コンソール・オペレーター・ガイド」](#)を参照してください。

BigFix コンソールに設定された権限

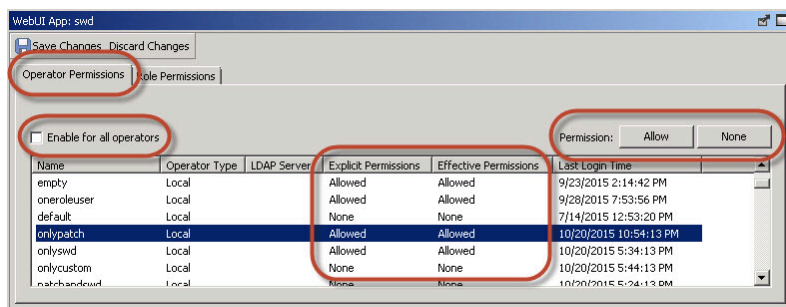
このページには、BigFix コンソールに設定された WebUI 権限を管理するための手順が記載されています。

明示的な権限と有効な権限がどのように動作するかに関する説明を含む、詳細な手順は以下のとおりです。要約すると以下のとおりです。オペレーターの権限と役割を設定するには、コンソールの「**すべてのコンテンツ**」 > 「**WebUI アプリケーション**」画面の順に使用します。または同じ設定を「**すべてのコンテンツ**」 > 「**オペレーター**」 > 「**WebUI**」画面と「**すべてのコンテンツ**」 > 「**役割**」 > 「**WebUI**」画面から管理します。WebUI のログイン・ページにアクセスするには、「**すべてのコンテンツ**」 > 「**オペレーター**」 > 「**詳細**」画面と「**すべてのコンテンツ**」 > 「**役割**」 > 「**詳細**」画面の順に使用します。

権限設定WebUI アプリケーション画面



1. WebUI アプリケーションを選択します。
2. 「オペレーター」または「役割」タブを選択してから、オペレーターまたは役割を選択します。



3. 「許可」ボタンをクリックして、アクセス権を付与するか、「なし」ボタンをクリックしてアクセス権を無効にします。
4. 「変更を保存」をクリックします。

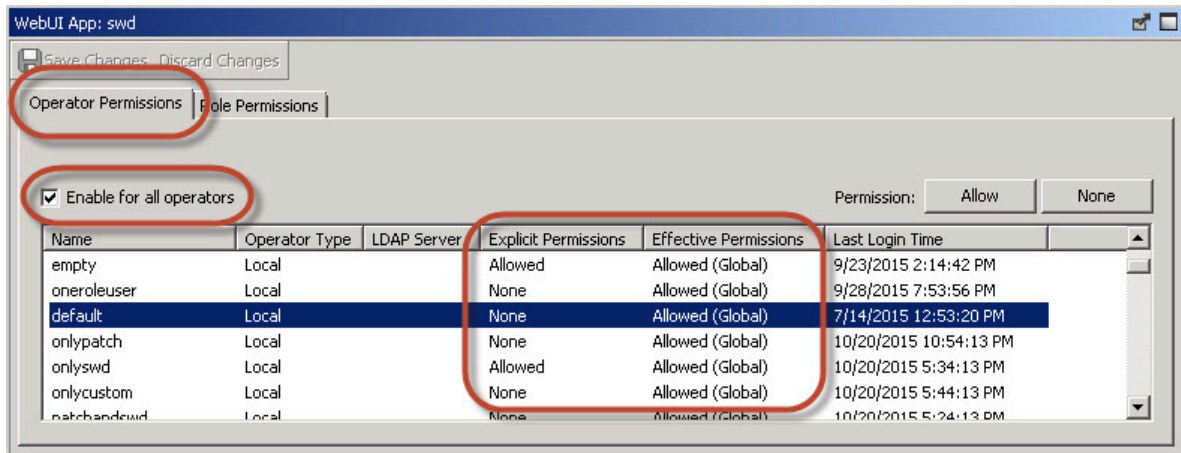
すべてのオペレーターにアクセス権を1回のクリックで付与するには、「すべてのオペレーターに対して有効化」チェック・ボックスをクリックします。

直接1人のオペレーターに与えられた権限は、“明示的”権限と呼ばれています。1人または複数のオペレーターに間接的に(例えば役割を介するなどして)与えられた権限は、“有効な”権限の名前で知られています。オペレーターの明示的な権限と有効な権限の間で矛盾がある場合、どうなりますか。例えば、パッチ・アプリケーションへのアクセス権限がオペレーターAの設定では有効、オペレーターAに割り当てられた役割の設定では無効になっている場合、どうなるでしょうか。このようなアクセス権限設定の矛盾が生じたときBigFixでは、矛盾する2つの設定のうち制限の緩やかな方が適用するため、有効な権限が有効となります。このテーブルは明示的な権限の組み合わせごとの結果を表したものです。

表 3. 明示的な権限と有効な権限

明示的な権限	有効な権限
はい - オペレーターに付与されています。はい - 役割を通じてオペレーターに付与されています。はい - 「すべてのオペレーターに対して有効化」ボックスにチェック・マークが付いています。	はい、「許可」です
いいえ - オペレーターに対して無効になっています。いいえ - 割り当てられている役割に対して無効になっています。いいえ - 「すべてのオペレーターに対して有効化」ボックスがクリアされています。	いいえ、「なし」です
はい - オペレーターに付与されています。いいえ - 割り当てられている役割に対して無効になっています。いいえ - 「すべてのオペレーターに対して有効化」ボックスがクリアされています。	はい、「許可」です
いいえ - オペレーターに対して無効になっています。はい - 役割を通じてオペレーターに付与されています。いいえ - 「すべてのオペレーターに対して有効化」ボックスがクリアされています。	はい、「許可」です
いいえ - オペレーターに対して無効になっています。いいえ - 割り当てられている役割に対して無効になっています。はい - 「すべてのオペレーターに対して有効化」ボックスにチェック・マークが付いています。	はい、「許可(グローバル)」です

WebUI アプリケーションの「すべてのオペレーターに対して有効化」チェック・ボックスで権限が付与されている場合、有効な権限の値は「許可」から「許可(グローバル)」に変わります。



WebUI 権限の設定: オペレーター画面

オペレーターの WebUI コンポーネントへのアクセス権限を付与または解除するには、以下のようになります。

1. 「すべてのコンテンツ」 > 「オペレーター」 > 「WebUI アプリケーション」 タブの順に進みます。
2. オペレーターを選択します。
3. WebUI アプリケーションを選択します。
4. 「許可」または「なし」をクリックして、アクセス権限を付与するか、無効にします。
5. 「変更を保存」をクリックします。

WebUI 権限の設定: 「役割」画面

役割の WebUI コンポーネントへのアクセス権限を付与または解除するには、以下のようにします。

1. 「すべてのコンテンツ」 > 「オペレーター」 > 「WebUI アプリケーション」 タブの順に進みます。
2. 役割を選択します。
3. WebUI アプリケーションを選択します。
4. 「許可」または「なし」をクリックして、アクセス権限を付与するか、無効にします。
5. 「変更を保存」をクリックします。

アクション作成の特権

「アクションの作成が可能」権限が「いいえ」に設定されているオペレーターには、コンテンツのデプロイメントはできませんが、他のユーザーが作成したデプロイメントを表示することはできます。

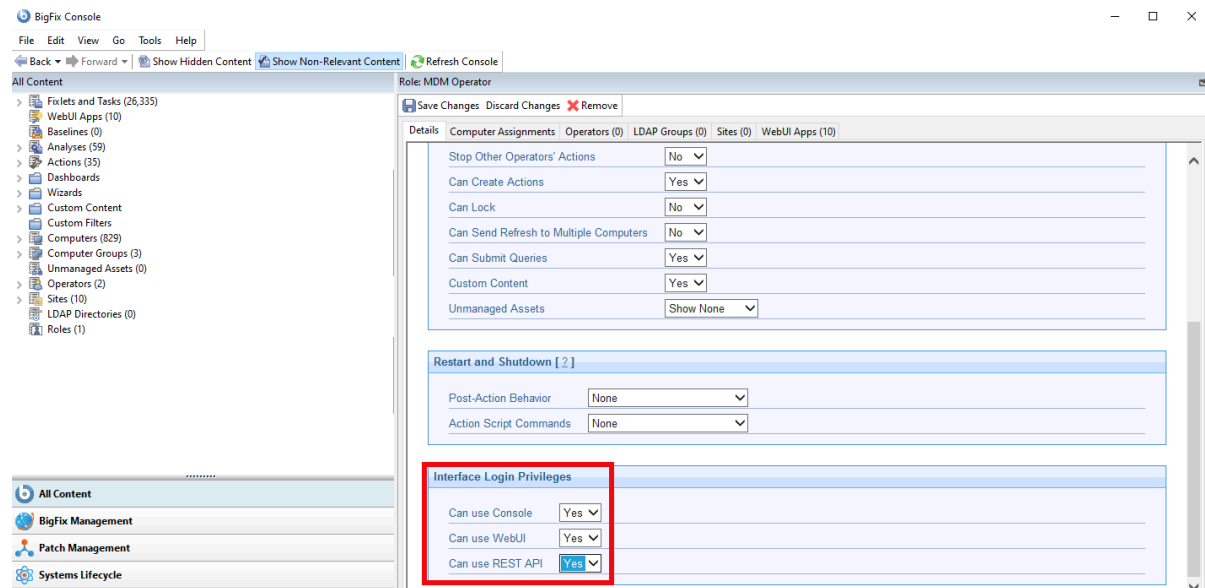
アクション作成の権限を「いいえ」に設定するには、以下のようにします。

1. 「すべてのコンテンツ」 > 「オペレーター」 > 「詳細」または「すべてのコンテンツ」 > 「役割」 > 「詳細」の順に進みます。
2. 「権限」ペインまでスクロールダウンして、「アクションの作成が可能」を“「いいえ」”に設定します。
3. 「変更を保存」をクリックします。

The screenshot shows the BigFix Console interface. On the left, a navigation pane lists various content categories, with 'Operators (2)' and 'Roles (1)' highlighted. The main window displays the configuration for the 'MDM Operator' role. The 'Details' tab is selected, and the 'Computer Assignments' section is highlighted with a red box. This section contains several checkboxes for permissions: 'Stop Other Operators' Actions (No), 'Can Create Actions' (Yes), 'Can Lock' (No), 'Can Send Refresh to Multiple Computers' (No), 'Can Submit Queries' (Yes), 'Custom Content' (Yes), and 'Unmanaged Assets' (Show None). Below this, the 'Restart and Shutdown' section shows 'Post-Action Behavior' and 'Action Script Commands' both set to 'None'. The 'Interface Login Privileges' section shows 'Can use Console' (Yes), 'Can use WebUI' (Yes), and 'Can use REST API' (Yes).

WebUI へのログイン・アクセスの有効化/無効化

オペレーターまたは役割の WebUI アクセス権限を有効化/無効化し、ログイン・ページへのアクセス権限をオン/オフできます。「いいえ」を選ぶと、ユーザーのログイン資格情報は拒否されます。



オペレーターの WebUI ログイン・アクセス権限を付与または解除するには、以下のようにします。

1. 「すべてのコンテンツ」 > 「オペレーター」 > 「詳細」 タブの順に進みます。
2. 「インターフェース・ログイン権限」までスクロールダウンします。
3. 「WebUI を使用できます」を“「はい」”または“「いいえ」”に設定します。
4. 「変更を保存」をクリックします。

役割の WebUI ログイン・アクセス権限を付与または解除するには、以下のようにします。

1. 「すべてのコンテンツ」 > 「役割」 > 「詳細」 タブの順に進みます。
2. 「インターフェース・ログイン権限」までスクロールダウンします。
3. 「WebUI を使用できます」を“「はい」”または“「いいえ」”に設定します。
4. 「変更を保存」をクリックします。

特定のアプリケーションに関する注記

このページには、特定のアプリケーションに関する重要な情報が記載されています。

「許可」と「通知の送信」サービス

「通知の送信」オプションにより、オペレーターは、BigFix のデプロイメントの完了時または失敗時に E メール・アラートを発行できます。使用方法:

- 「通知の送信」 サービスが有効でなければなりません。
- オペレーターの「アクションの作成が可能」と「カスタム・コンテンツ」権限は、どちらも「はい」にする必要があります。

権限と監視ダッシュボード

「概要」ダッシュボードに表示される情報は、ログインしているユーザーの権限を反映しています。例えば、Software アプリケーションを使用する権限のないオペレーターには、ソフトウェア・パッケージ・データが表示されません。デバイス合計にはオペレーターのデバイス割り当てが反映されています。例えば Windows マシンのみなど、デバイスのサブセットを扱うオペレーターには、Windows マシンのみのデバイス合計が表示されます。

権限と BigFix Query

「照会を送信可能」および「カスタム・コンテンツ」権限を使用すると、照会アプリケーションでオペレーターに表示される情報を細かく調整できます。どちらの権限もコンソールで設定し、オペレーターと役割を設定できます。

「照会を送信可能」権限

「照会を送信可能」権限を使用すると、照会をサポートする REST API へのアクセスを制御できます。「照会を送信可能」が「はい」に設定されているオペレーターには、照会結果が表示されます。「照会を送信可能」が「いいえ」に設定されているオペレーターには、照会結果とメッセージが表示されません。「ログインしているユーザーは、照会を実行依頼できません。」BigFix Query とその REST API の使用について詳しくは、『[BigFix プラットフォーム構成ガイド](#)』の『[BigFix Query の使用によるクライアント情報の取得](#)』を参照してください。

「カスタム・コンテンツの作成」権限が「いいえ」に設定されている

「照会を送信可能」が「はい」、「カスタム・コンテンツ」が「いいえ」に設定されているオペレーターは、次のことができます。

- オペレーターに使用権限のあるカスタム・サイトで照会を実行する。照会対象は個々のマシン、マニュアル・グループ、および動的グループなどです。
- 照会をフィルターし、検索する
- 照会の変数に値を割り当てる
- 照会結果をファイルに保存する。

次のオペレーターは照会の追加や編集、照会に含まれる関連式の表示ができません。

「カスタム・コンテンツの作成」権限が「はい」に設定されている

「照会を送信可能」が「はい」、「カスタム・コンテンツ」が「はい」に設定されているオペレーターは、次のことができます。

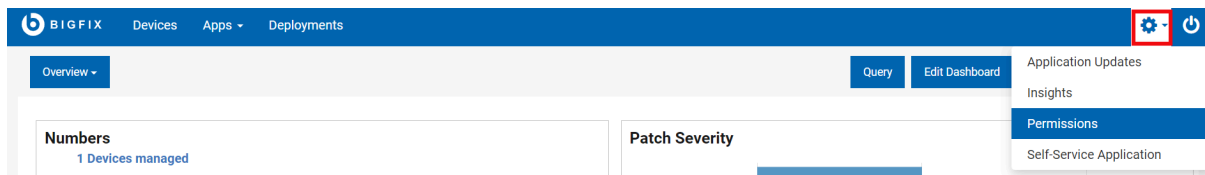
- オペレーターに使用権限のあるカスタム・サイトで照会を実行する。照会対象は個々のマシン、マニュアル・グループ、および動的グループなどです。
- 照会をフィルターし、検索する
- 照会と照会カテゴリーを作成し、編集する。
- サンプル照会をロードする。

- 照会パラメーター値を作成、編集し、割り当てる。
- 照会の関連式を表示し、編集する。
- 照会結果をファイルに保存する。

WebUI 権限サービス

オペレーターが一度にデプロイできるコンテンツの量、デプロイ先として指定できるデバイスの数、照会できるデバイスの数を制御するには、WebUI 権限サービスを使用します。

この権限サービスを使用して、役割に対して無制限の対象指定権限を付与することもできます。このサービスを使えば、WebUI アプリケーションでの権限と設定をさらに細かく制御できるようになります。マスター以外のオペレーターの役割に、パッチ・ポリシーのさまざまなアクションを実行する権限を付与することもできます。権限サービスは「設定」メニューから開きます。



WebUI 権限サービスのグローバル権限はマスター以外のオペレーターにのみ適用されます。マスター・オペレーターには、すべての WebUI アプリケーションに対する全アクセス権限があります。

! **重要:** 次のシナリオでは、2つのマスター以外のオペレーターの役割と1つのマスター・オペレーターの役割について検討しています。

Assign WebUI Access to Role	Master Operator	Patch Policies	MDM
Set Global Permissions Global Permissions apply to non-master operators only. Master operators have full access to all WebUI applications. Global Permissions	1	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>
Autopatch Role	0	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
MDM Role	0	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>
MO Role	0	✓ Members have full access to all the WebUI applications.	

1. グローバル権限の「パッチ・ポリシー」チェック・ボックスが選択されている場合、マスター以外のオペレーターの役割はパッチ・ポリシー・アプリケーションへのアクセス権をグローバル権限から継承し、マスター・オペレーターの役割はデフォルトですべての WebUI アプリケーションへの全アクセス権限を持ちます。



2. グローバル権限の「パッチ・ポリシー」チェック・ボックスが選択されていない場合、マスター以外のオペレーターの役割はパッチ・ポリシー・アプリケーションへのアクセス権を持たず、マスター・オペレーターの役割はデフォルトですべての WebUI アプリケーションへの全アクセス権限を持ちます。
3. グローバル権限の「パッチ・ポリシー」チェック・ボックスが選択されていない場合、役割の「パッチ・ポリシー」チェック・ボックスを手動で選択することにより、マスター以外のオペレーターの役割にパッチ・ポリシー・アプリケーションへのアクセス権を付与することが可能で、マスター・オペレーターの役割はデフォルトですべての WebUI アプリケーションへの全アクセス権限を持ちます。

グローバル対象の上限およびグローバル・パッチ・ポリシーの権限を編集するには、「**グローバル権限**」をクリックします。「**デプロイメント**」タブで、管理者はマスター以外のオペレーターのコンテンツの対象の上限およびデバイス上限を設定できます。マスター以外のオペレーターは、設定された制限を超えられません。違反した場合、デプロイメントや照会アクティビティーは許容範囲内におさまるまで中断されます。グローバル対象の最大数は、無制限の対象指定権限を付与された役割のメンバーを除く、マスター以外のオペレーターすべてに適用されます。「**パッチ・ポリシー**」タブで管理者は、マスター以外のオペレーターにさまざまなアクションを実行できる権限を付与できます。

「**パッチ・ポリシー**」タブの特定のパッチ・ポリシーのチェック・ボックスが選択されている場合、他のパッチ・ポリシーのチェック・ボックスは自動的に選択および選択解除されます。これは権限の依存関係によります。

1. 「ポリシーの削除」権限が付与されている場合、マスター以外のオペレーターは、「ポリシーの作成/編集」、「スケジュールの削除」、「スケジュールの作成/編集」、「独自の対象の追加/削除」、「他のオペレーターの対象の削除」の権限も持ちます。
2. 「ポリシーの作成/編集」権限が付与されている場合、マスター以外のオペレーターは「ポリシーの更新」の権限も持ちます。
3. 「スケジュールの削除」権限が付与されている場合、マスター以外のオペレーターは、「スケジュールの作成/編集」、「独自の対象の追加/削除」、「他のオペレーターの対象の削除」の権限も持ちます。

役割固有権限の編集の対象となる役割をクリックします。

- 「**デプロイメント**」タブで、管理者は選択した役割のコンテンツの対象の上限およびデバイス上限を設定できます。オペレーターは、設定された制限を超えられません。違反した場合、デプロイメントや照会アクティビティーは許容範囲内におさまるまで中断されます。
- 「**パッチ・ポリシー**」タブで管理者は、特定の役割にさまざまなアクションを実行できる権限を付与できます。



注: 「パッチ・ポリシー」タブは、選択した役割にパッチ・ポリシー・アプリケーションへのアクセス権限がある場合のみ表示されます。



重要: 役割の有効な権限は、グローバル権限および役割の権限の最小の制限です。



例: コンテンツの対象の上限

コンテンツの対象の上限に対し、グローバル権限は 5 に設定され、役割の権限は 8 に設定されています。グローバル権限および役割の権限の最小の制限は 8 です。有効な権限は最小の制限である 8 に設定されています。

Permissions for Role 1 Cancel Save

Deployments Patch Policies

BigFix applies the least restrictive of the two permissions: role specific permissions and global permissions. Operators cannot exceed the established limits: their deployment and query activities will be suspended until they fall within the acceptable range.

Target Limits	Set Role Permissions	Global	Effective
Content Target Limit	8 <input type="checkbox"/> Unlimited	5	8
Device Target Limit	3 <input type="checkbox"/> Unlimited	2	3

「無制限」チェック・ボックスが選択されている場合、有効な権限は無制限に設定されます。

例: パッチ・ポリシー

「ポリシーのアクティブ化/中断」チェック・ボックスが、グローバル権限に対しては選択されず、役割の権限に対しては選択されています。この場合、グローバル権限および役割の権限のうち制限が少ない方により、この役割のオペレーターは「ポリシーのアクティブ化/中断」を実行できます。

Permissions for Role 1 Cancel Save

Deployments Patch Policies

BigFix applies the least restrictions to operators using role-specific settings and global permissions

Allow operators to	Set Role Permissions	Global	Effective
Activate / Suspend Policy	<input checked="" type="checkbox"/>	X	<input checked="" type="checkbox"/>
Delete Policy	<input type="checkbox"/>	X	X
Create / Edit Policy	<input type="checkbox"/>	X	X
Refresh Policy	<input checked="" type="checkbox"/>	X	✓
Delete Schedule	<input type="checkbox"/>	X	X
Create / Edit Schedule	<input type="checkbox"/>	X	X
Remove Other Operator's Targets	<input type="checkbox"/>	X	X
Add / Remove Your Own Targets	<input type="checkbox"/>	X	X

第6章. アプリケーション更新の管理

アプリケーションの更新は、Application Update Manager を使用して管理できます。

Application Update Manager を使用すると、次のことができます。

- 各 WebUI アプリケーションのバージョン情報を表示する
- 使用可能な更新を表示して適用する
- WebUI サイトの収集を随時実行する
- AutoUpdate 設定を表示する

Update Manager を表示するには、ナビゲーション・バーの「設定」アイコンをクリックします。このアイコンが表示されるのはマスター・オペレーターだけです。

Select the release to which you want to update the WebUI
All applications will be updated to the latest version available at the selected point in time.

Mar 25, 2020 UTC: 14 Applications Available

WebUI API Verification	46
WebUI App Admin Verification	14
WebUI Auto Patch Verification	31
WebUI Content App Verification	20
WebUI Custom Verification	27
WebUI Data Sync Verification	39
WebUI Framework Verification	81
WebUI Patch Verification	25
WebUI Permissions and Preferences Verification	17
WebUI Profile Management Verification	24
WebUI Query Verification	38
WebUI Software Distribution Verification	45
WebUI Take Action Verification	31
WebUI Insights Verification	21

Current WebUI Versions

WebUI API Verification	45	24 Mar 2020
WebUI App Admin Verification	13	24 Mar 2020
WebUI Auto Patch Verification	30	25 Mar 2020
WebUI Common Verification	31	23 Mar 2020
WebUI Content App Verification	19	24 Mar 2020
WebUI Custom Verification	26	24 Mar 2020
WebUI Data Sync Verification	38	24 Mar 2020
WebUI Framework Verification	79	25 Mar 2020
WebUI Insights Verification	20	25 Mar 2020
WebUI Patch Verification	24	24 Mar 2020
WebUI Permissions and Preferences Verification	16	25 Mar 2020

Auto Update: Off
Update Delay: 0 days
Current WebUI Versions

WebUI API Verification	45
WebUI App Admin Verification	13
WebUI Auto Patch Verification	30
WebUI Common Verification	31
WebUI Content App Verification	19
WebUI Custom Verification	26
WebUI Data Sync Verification	38
WebUI Framework Verification	79
WebUI Insights Verification	20
WebUI Patch Verification	24
WebUI Permissions and Preferences Verification	16
WebUI Profile Management Verification	23
WebUI Query Verification	37
WebUI Software Distribution Verification	44
WebUI Take Action Verification	30

バージョン番号はアプリケーションのサイトを反映しています。例えばパッチ・アプリケーションは、WebUI のパッチ・サイトにあります。WebUI アプリケーション本体 (共通アプリケーションとログイン・アプリケーションを含む) は、「共通」サイトにあります。

バージョン 9.5.7 以降の BigFix プラットフォームでは、Update Manager に「収集」ボタンが表示されます。V9.5.7 では BigFix サーバーが新しいバージョンの WebUI があるかどうかを 6 時間ごとにチェックします。前回の収集後に公開された新しいバージョンは「収集」ボタンを使用して取得します。

アプリケーションを更新するときは、アプリケーション、選択した更新、以前の更新のすべてが適用されます。更新対象のアプリケーションが、まだ使用可能でない別のアプリケーションのバージョンに依存している場合は、内部依存関係チェックにより、そのアプリケーションを更新できなくなります。例えば、WebUI パッチ・アプリケーションのあるバージョンが、まだリリースされていない共通アプリケーションの機能に依存している場合は、そのパッチ・アプリケーションのバージョンをインストールできません。

更新の実行中も、WebUI サービスは引き続き使用可能です。アプリケーションを更新するには、

1. 「**選択**」をクリックします。更新後に実行されるバージョンを示す確認ダイアログが表示されます。
2. 「**今すぐ更新**」をクリックして操作を完了するか、「**キャンセル**」をクリックして **Update Manager** に戻ります。

WebUI Common アプリケーションを更新している場合には、WebUI サービスが自動的に再開することを考慮に入れてください。

The screenshot shows the 'Application Updates' section with the following content:

Application Updates

Select the release to which you want to update the WebUI
All applications will be updated to the latest version available at the selected point in time.

- Sep 22, 2016:** Some dependencies are not yet available for the included applications. Software Distribution: 9. Callout: This update will become available when the updates it depends on are available.
- Sep 22, 2016:** 1 Application Available. Application Administration: 4. Callouts: Version (site) number. Update (site) name.
- Aug 25, 2016:** 1 Application Available. Custom. Callout: Release date, followed by the number of updates included in the release.

注意

- 更新が適用されたあと、以前のバージョンにはロール・バックできません。
- AutoUpdate がオンで、遅延期間が 0 に設定されている場合は、Update Manager 内の使用可能な更新の数も 0 になります。これは、更新が自動的に適用されるからです。AutoUpdate がオンで、遅延期間が 30 日に設定されている場合は、使用可能な更新の数が 30 日前までさかのぼって表示されます。これは、30 日よりも前の更新が既に適用されているからです。
- AutoUpdate がオフの場合は、使用可能な更新の数が無期限にさかのぼって表示されます。
- **WebUI Common** アプリケーションの更新後に WebUI サービスを在席で再開できるのは、パッチ 2 以降のみです。

AutoUpdate と AutoUpdateDelay

AutoUpdate 機能を使用すると、新バージョンの WebUI アプリケーションが使用可能になったと同時に、自動的に適用されます。AutoUpdate が有効な間は、WebUI アプリケーションの更新が自動的に適用されます。AutoUpdate が無効のときは、WebUI アプリケーションの更新を手動で適用する必要があります。AutoUpdate がオンになっているときは、AutoUpdateDelay 設定を使用して、自動更新のタイミングを制御できます。更新を直ちにインストールする (更新の遅延 = 0 日間) か、更新を最大 30 日間遅らせるように設定できます。自動更新を遅らせる理由には、次のようなものがあります。

- 新機能によって変更される手順を更新する時間をとる
- 実動システムをインストールする前に、テスト・デプロイメントで新バージョンのアプリケーションを試用する
- 特定のバージョンの WebUI を前述の理由、もしくはその他の理由でそのまま使用する

WebUI をインストールするとき、デフォルトでは AutoUpdate 機能はオンに、AutoUpdateDelay のデフォルトは 0 日間に設定されています。WebUI サービスのインストール先コンピューターで AutoUpdate と AutoUpdateDelay の設定を調整するには、BigFix コンソールを使用します。

1. BigFix コンソールで、「**コンピューター**」を選択します。
2. WebUI サーバー (BigFix サーバーまたはリモート・マシン) を右クリックします。
3. 「**コンピューター設定の編集**」を選択します。
4. 変更する設定を選択します。
 - AutoUpdate を使用するには、`_WebUIAppEnv_APP_UPDATE_ENABLE_AUTO` を選択します。1 に設定すると、WebUI アプリケーションが、保留サイト・キャッシュにある最新バージョンに自動的に更新されます。0 に設定すると、AutoUpdate がオフになります。
 - AutoUpdateDelay を使用するには、`_WebUIAppEnv_APP_UPDATE_DELAY_DAYS` を選択します。ある更新から次の更新までに待機する日数を入力します。遅延範囲は 0 日から 30 日で、デフォルトは 0 日です。



注: WebUI のインストール後に、AutoUpdate と AutoUpdateDelay のデフォルトを初めて変更するときは、これらの設定を更新するのではなく、以下で指定したクライアント設定を追加します。初めて設定を追加するときは、手順のステップ 3 で、「**コンピューター設定の編集**」ではなく「**コンピューター設定の追加**」を選択して、必要な設定名と値を入力します。次に AutoUpdate と AutoUpdateDelay の設定に変更を加えるときは、「**コンピューター設定の編集**」オプションを使用します。

災害復旧

ご使用の環境でシステム・クラッシュの発生後に特定バージョンの WebUI アプリケーションをすばやくリストアするには、WebUI サーバー上の **WebUI** フォルダーにある **Sites** フォルダーと **Pending Sites** フォルダーの定期的なバックアップをスケジュールしてください。**Sites** フォルダーには、現在実行中の WebUI アプリケーションのバージョンが保管されます。(Sites フォルダー内の) **Pending Sites** フォルダーには、入手可能な未インストールのバージョンが保管されます。

- バックアップを使用してシステムをリストアするには、バックアップ・ファイルを **Sites** フォルダーと **Pending Sites** フォルダーにドロップします。
- クラッシュの発生後に最新バージョンの WebUI アプリケーションを使用するには、WebUI サーバーを再起動します。
- クラッシュの発生前に使用していた各アプリケーションの最新バージョンのリストを生成するには、以下の関連文を使用してダッシュボード変数を確認します。

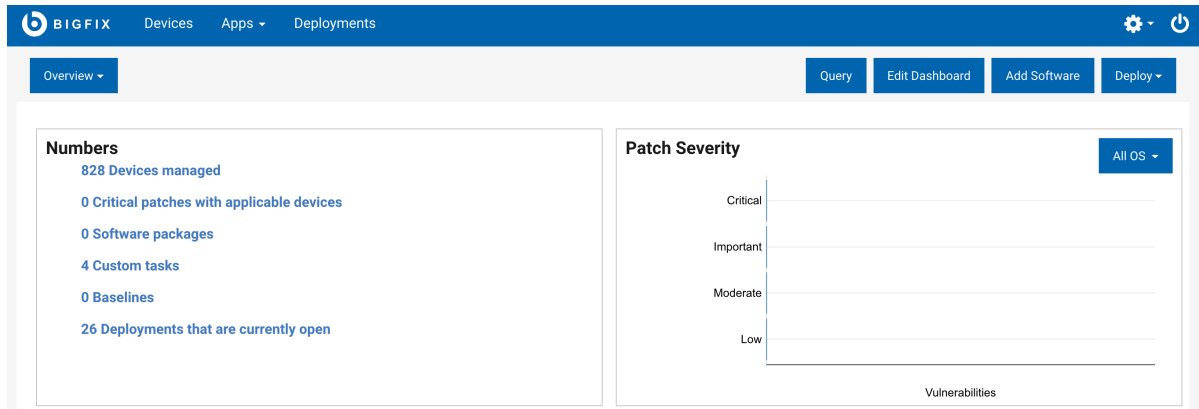
```
shared variable ("WebUIAppAdmin", "Current_Sites")
```


バックアップを使用できなくなった場合は、テクニカル・サポートにお問い合わせください。テクニカル・サポートは追加のオプションを提供できます。

第7章. ダッシュボードの編集

WebUI の編集ツールを使用して、WebUI の「概要」ダッシュボードと「要旨」ダッシュボードをカスタマイズします。

BigFix データを抽出してさまざまな形式で表示し、企業全体での主要な情報を要約します。マスター・オペレーターのみが、アクティブなダッシュボードを編集してカスタマイズできます。



各タイルをドラッグして配置し、作成しながらダッシュボードの設計をプレビューします。事前定義されたタイルのライブラリーから取り出すか、独自に設計します。

事前定義されたタイルには、「環境の概要」、「パッチ・コンプライアンス」、「パッチの重要度」、「新しいリリース」、「過去 30 日間のデプロイメント」が含まれます。

WebUI のデフォルトの概要タイルは多くのユーザーに役立ちます。一方、カスタム・タイルは、ユーザー独自のデプロイメントに固有のきわめて重要な情報を WebUI の「概要」と「要旨」に配置できます。ユーザー独自のタイルを設計し、作成するには、5つのカスタム・タイル・タイプを使用します。主要数値、概要、リスト、チェック、およびグラフ。

Add Custom Tiles ▼

Numbers Tile

0 Locked Devices

4 Software Packages for Windows

3 Devices require Critical Patches

11.8k Patches

Summary Tile

All Devices **5**

Devices Critical **3**

60%
Critically Vulnerable

List Tile

Patch Deployments

Name	Issue Date
3102436: UPDATE: Microsoft .NET Framework 4.6.1 Available - Windows 7 S...	5/5/16
RHBA-2015.1993 - OpenLDAP Bug Fix Update - Red Hat Enterprise 6.0 (SE...	5/4/16
MS11-025: Vulnerability in Microsoft Foundation Class (MFC) Library Could ...	5/4/16
2515325: Windows Explorer may crash in Windows 7 or in Windows Server ...	4/28/16
3102436: UPDATE: Microsoft .NET Framework 4.6.1 Available - Windows 7 S...	4/28/16
2637518: An update is available - .NET Framework 3.5.1 - Windows 7 SP1	3/28/16
3009008: Security Advisory: Vulnerability in SSL 3.0 Could Allow Information...	3/28/16
Multiple Action Group	3/24/16
Multiple Action Group	3/24/16
UPDATE: Microsoft .NET Framework 4.6 Available - Windows Vista SP2 / Win...	3/17/16

Checks Tile

Fixlet A **20%**

Fixlet B **100%**

Fixlet C **20%**

20%
Compliant

WebUI のダッシュボードはすべてのユーザーが表示して使用できますが、編集できるのはマスター・オペレーターのみです。いずれかのダッシュボードに加えられた変更は、すべてのユーザーに対して、その概要のデフォルトの設計となります。ダッシュボードの要素とデータは、マスター・オペレーター以外のオペレーターに付与する BigFix の権限レベルと割り当てを反映するように調整されます。

以下の 4 つの画面がタイトルの編集と作成に使用されます。

- 「**ダッシュボードの編集**」 - タイルの配置、削除、および追加を行います。
- 「**タイトルの選択**」 - 事前定義されたタイトルとカスタムのタイトル・テンプレートを選択します。
- 「**タイトルの作成**」 - 最上位データ・オブジェクトの選択、タイトル要素の配置、および設計のプレビューを行います。
- 「**フィルターの定義**」 - タイル・データの詳細化と複合結合を実行します。

共通の編集手法

ダッシュボードを編集するには、「**ダッシュボードの編集**」ボタンをクリックします。

「**ダッシュボードの編集**」ページでは、以下の操作を実行できます。

- タイルの追加と削除。
- ページ上のタイトルの位置変更。
- タイル・パフォーマンス・モニターのメッセージのオン/オフの切り替え。

タイル・パフォーマンス・モニターは、読み込みが遅い WebUI のすべてのダッシュボード・タイルについて次のメッセージを表示します。“このタイルに使用したフィルターは、読み込みに 10 秒以上かかりました。より小さい BigFix データ・セットへのアクセス権限を持つオペレーターの場合、パフォーマンスが向上する見込みです。より効率的なフィルターを使用する新しいタイルを作成すると、パフォーマンスが向上します。パフォーマンス監視は、管理者によって無効にできます。”タイルの読み込みが遅いときにメッセージを表示するには、「パフォーマンス・モニター」スイッチを「オン」に設定します。パフォーマンス・モニターはデフォルトでは「オフ」に設定されています。

タイルを削除するには、右上隅の「X」をクリックします。

タイルを位置変更するには、タイルを移動したい場所にドラッグします。

タイルを追加するには、以下のようになります。

1. 「**タイルの追加**」ボタンをクリックします。最大 6 個のタイルをダッシュボードに配置します。既に 6 個のタイルがあるダッシュボードにタイルを追加するには、まず 1 個削除します。
2. いずれかのタイル・ライブラリーからタイルを選択します。
 - カスタムのタイルを追加するには、「**カスタム・タイルの追加**」バーをクリックします。カスタム・タイルを作成する方法については、[カスタム・タイルの操作 \(ページ \) 40](#)を参照してください。
 - 事前定義されたタイルを追加するには、「**タイル・ライブラリーから追加**」バーをクリックします。次にタイルを選択し、目的の場所にドラッグします。各タイルとその要素の説明については、[事前定義されたタイルの操作 \(ページ \) 36](#)を参照してください。

事前定義されたタイルの操作

事前定義されたタイルをダッシュボードに追加する方法を学習します。

タイルは、WebUI のデフォルトのダッシュボード上で任意の組み合わせで使用できます。

事前定義されたタイルをダッシュボードに追加するには、以下のようになります。

1. 「**ダッシュボードの編集**」ボタンをクリックします。
2. 「**ダッシュボードの編集**」ページで「**タイルの追加**」をクリックします。
3. 「**タイルの選択**」ページで「**タイル・ライブラリーから追加**」をクリックします。
4. タイルをクリックして、追加します。ページの既存のタイルの下に新規タイルが配置されます。
5. タイルをドラッグして、ページ上で並べ替えます。
6. ページの右上隅にある「**保存**」ボタンをクリックするか、変更を加えずに終了するには「**キャンセル**」をクリックします。

Activity List

- 4.5k Patches** A: Number of patches where Category = Security.
- 3 Unpatched devices** B: Devices relevant to targeted patches in A.
- 0 Active offers** C: Number of offers where Deployment State is neither Stopped, or Expired.

Deployments in the last 30 days

20 All Deployments
10 Patch
3 Software
7 Other Content

● Open ● Expired ● Stopped

All
Only Mine

MS12-035: Vulnerabilities in .NET Framework Could ...	Single Patch	0% ✓	1
MS12-035: Vulnerabilities in .NET Framework Could ...	Single Patch	0% ✓	1
Multiple Action Group	Group Patch	0% ✓	1
CESA-2016:0370 - Nss-Util Security Update - CentOS 7...	Single Patch	0% ✓	1

Deployment totals by type (all, patch, software, other) and their status (open, stopped, expired).

The last four deployments, with process status and device information.

Environment Overview

- 5 Managed devices** All BigFix devices.
- 45 Security patches** Number of patches where Category = Security, with at least one relevant device.
- 5 Software packages** Total number of packages.
- 6 Custom tasks** Total number of tasks.
- 7 Baselines** Total number of baselines.

New Patches

Patches released in last 30 days

Name	Released
Office 365 Version 15.0.4823.1002 Available - Office 2013	5/10/16
Office 365 Version 15.0.4823.1002 Available for Network Share for Office 36...	5/10/16
Office 365 Version 16.0.6868.2062 Available - Current Channel - Office 2016	5/10/16
Office 365 Version 16.0.6001.1078 Available - Deferred Channel - Office 2016	5/10/16
Office 365 Version 16.0.6741.2037 Available - First Release of Deferred Cha...	5/10/16
Office 365 Version 16.0.6868.2062 Available for Network Share for Office 36...	5/10/16
Office 365 Version 16.0.6001.1078 Available for Network Share for Office 36...	5/10/16
Office 365 Version 16.0.6741.2037 Available for Network Share for Office 36...	5/10/16
Office 2016 Version 16.0.6868.2062 Available - Current Channel - Office 2016	5/10/16
Office 2016 Version 16.0.6001.1078 Available - Deferred Channel - Office 20...	5/10/16
See More...	

Patches released in the past 30 days, and their release date.

Numbers

- 5** devices managed
- 45** critical patches with applicable devices
- 5** software packages
- 6** custom tasks
- 7** baselines
- 2** deployments that are currently open

Key system totals: all devices, critical patches, available software, tasks, baselines, and open deployments.

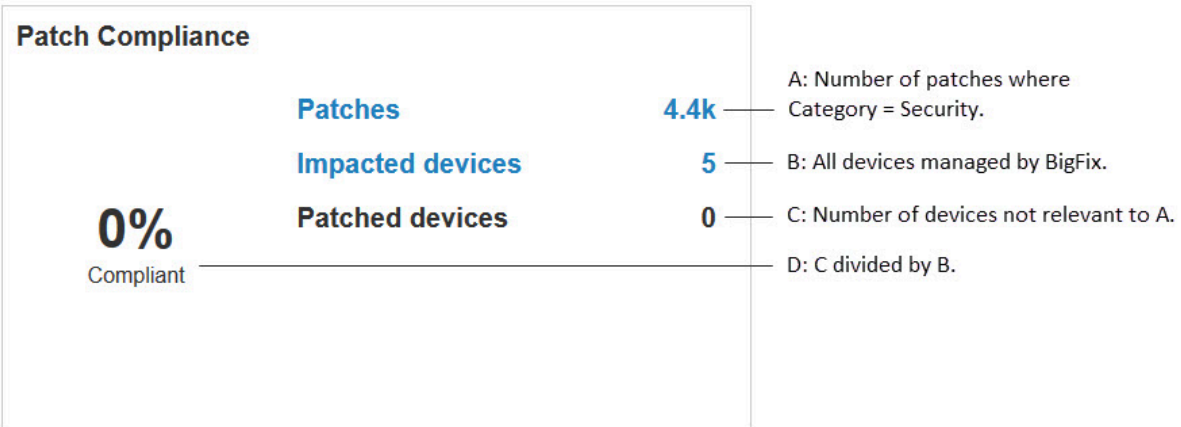
New Releases

Patches released in last 30 days

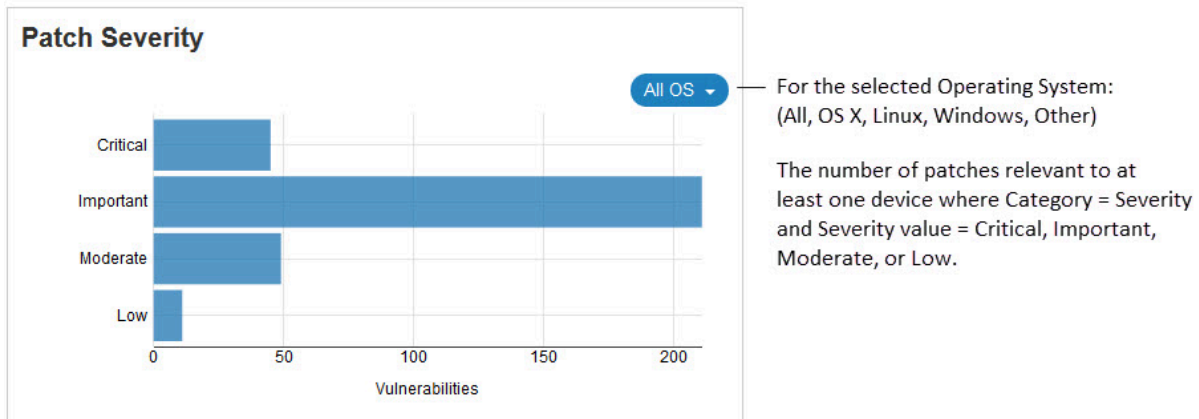
Name	Released
RHSA-2016.0706 - Mercurial Security Update - Red Hat Enterprise Linux 7 (...)	5/2/16
RHSA-2016.0701 - Java-1.7.1-ibm Security Update - Red Hat Enterprise 6.0	4/29/16
RHSA-2016.0701 - Java-1.7.1-ibm Security Update - Red Hat Enterprise 6.0 ...	4/29/16
RHSA-2016.0701 - Java-1.7.1-ibm Security Update - Red Hat Enterprise Lin...	4/29/16
Office 365 Version 16.0.6769.2040 Available - Current Channel - Office 2016	4/28/16
Office 365 Version 16.0.6769.2040 Available for Network Share for Office 36...	4/28/16
Office 2016 Version 16.0.6769.2040 Available - Current Channel - Office 2016	4/28/16
Office 2016 Version 16.0.6769.2040 Available for Network Share for Office 2...	4/28/16
MS16-039: Security Update for Microsoft Graphics Component - Lync 2010 - ...	4/26/16
RHSA-2016.0695 - Firefox Security Update - Red Hat Enterprise 6.0	4/26/16
See More...	

Patch ▾

Recent releases by date of availability. List by patch, software package, or custom content.



注: 大規模なデプロイメントでは、「パッチ・コンプライアンス」タイルは読み込みが遅い可能性があります。ご使用のデプロイメント環境に 10,000 個以上のエンドポイントがある場合は、このタイルでのデータの読み込みでダッシュボードの遅延が発生する場合があります。ダッシュボードを作成する管理者はこのタイルの使用を控えてください。



Popular

Recent deployments and device totals. List by patch, software package, or custom content.

Patch ▾

Popular patches deployed in the last 30 days

Name	Deployment C...
MS12-035: Vulnerabilities in .NET Framework Could Allow Remote Cod...	4
MS12-035: Vulnerabilities in .NET Framework Could Allow Remote Cod...	2
MS12-074: Vulnerabilities in .NET Framework Could Allow Remote Cod...	2
3125869: Vulnerability in Internet Explorer could lead to ASLR bypass -...	2
MAINTENANCE: Repair Permissions	1
UPDATE: Microsoft .NET Framework 4.0 Available	1
UPDATE: Microsoft .NET Framework 4.0 Client Profile Available	1
MS10-013: Vulnerability in Microsoft DirectShow Could Allow Remote C...	1
MS10-013: Vulnerability in Microsoft DirectShow Could Allow Remote C...	1
MS10-019: Vulnerabilities in Windows Could Allow Remote Code Exec...	1

Top 10 Patches

The most frequently deployed patches in the last 30 days, and device totals for each.

Popular patches deployed in the last 30 days

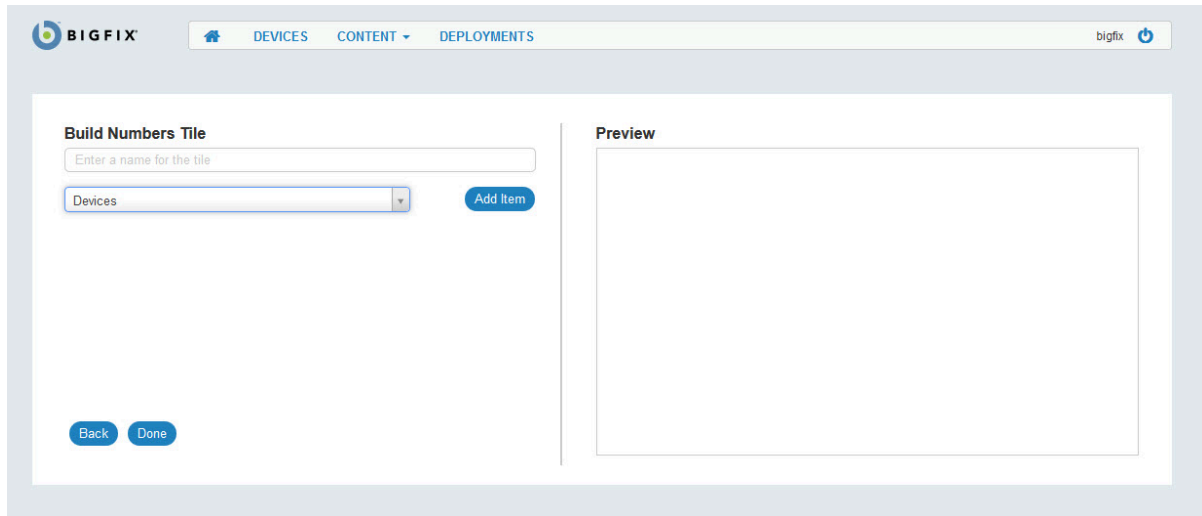
Name	Devices
3102436: UPDATE: Microsoft .NET Framework 4.6.1 Available - Windows 7 ...	4
2719662: Vulnerabilities in Gadgets Could Allow Remote Code Execution - ...	3
MS11-025: Vulnerability in Microsoft Foundation Class (MFC) Library Could ...	2
2515325: Windows Explorer may crash in Windows 7 or in Windows Server ...	2
RHBA-2015:1993 - OpenLDAP Bug Fix Update - Red Hat Enterprise 6.0 (SE...	1

カスタム・タイトルの操作

「**タイトルの作成**」画面と「**フィルターの定義**」画面を使用して、5つのタイプのカスタム・タイトルを作成します。以下では、カスタム・タイトルを作成する基本的なプロセスについて説明し、その後に各タイプの作成手順を示します。

- 主要数値
- 要約
- リスト
- Check
- グラフ

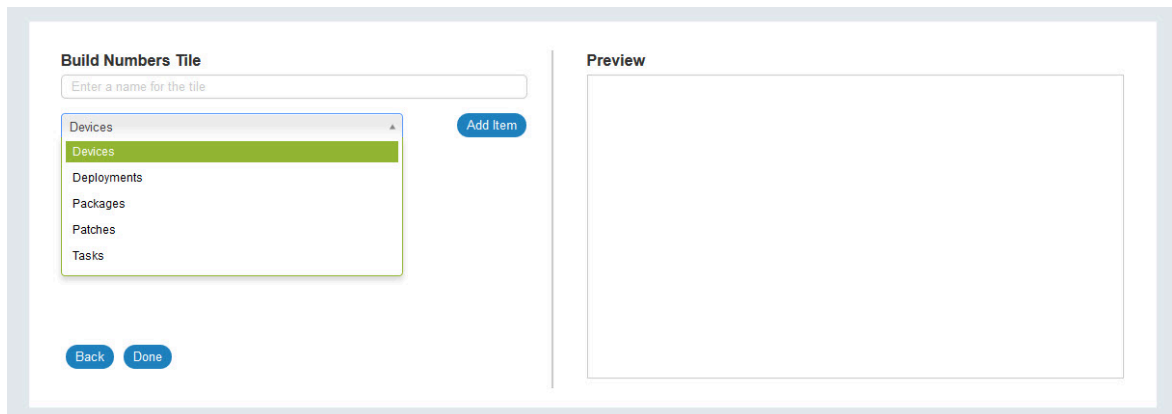
「**ダッシュボードの編集**」ページからカスタム・タイトルを選択すると、「**タイトルの作成**」ページが表示されます。



1. タイルのタイトルを入力します。ページ右側のプレビュー領域には、処理中のタイルが表示されます。

2. 「**タイルの作成**」ドロップダウン・リストから BigFix オブジェクトを選択します。

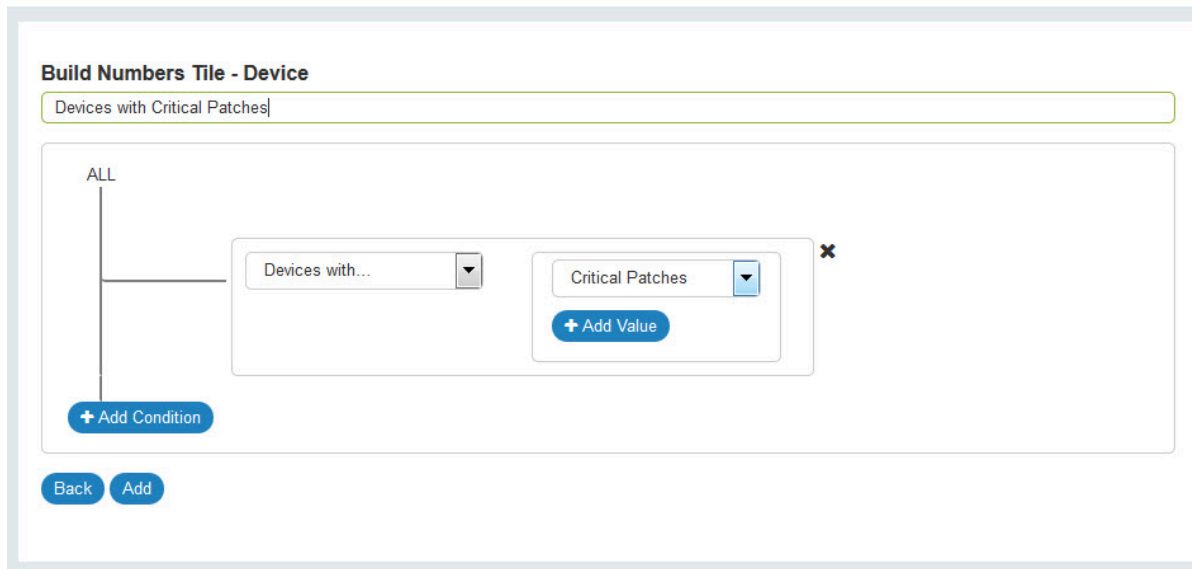
- デバイス
- デプロイメント
- パッケージ (ソフトウェア)
- パッチ
- タスク (カスタム・コンテンツ)



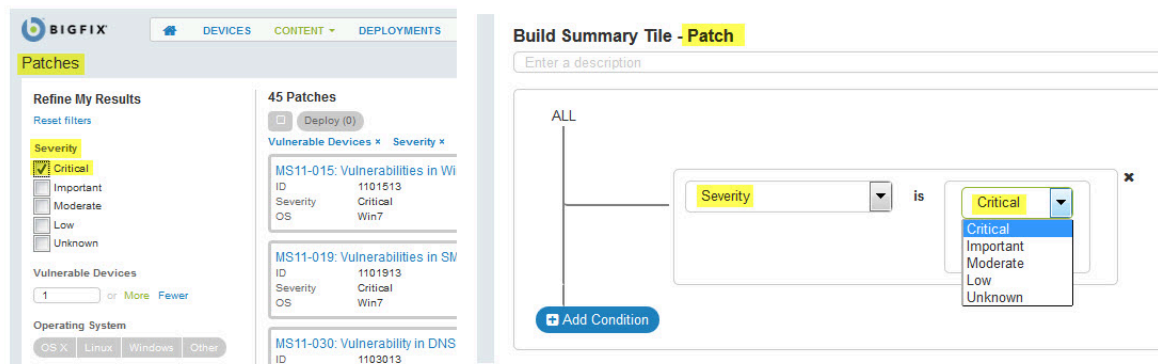
3. 「**項目の追加**」をクリックすると、「**フィルターの定義**」ページが表示されます。

4. 「**フィルターの定義**」画面を使用して、オブジェクト固有の条件と値を選択します。

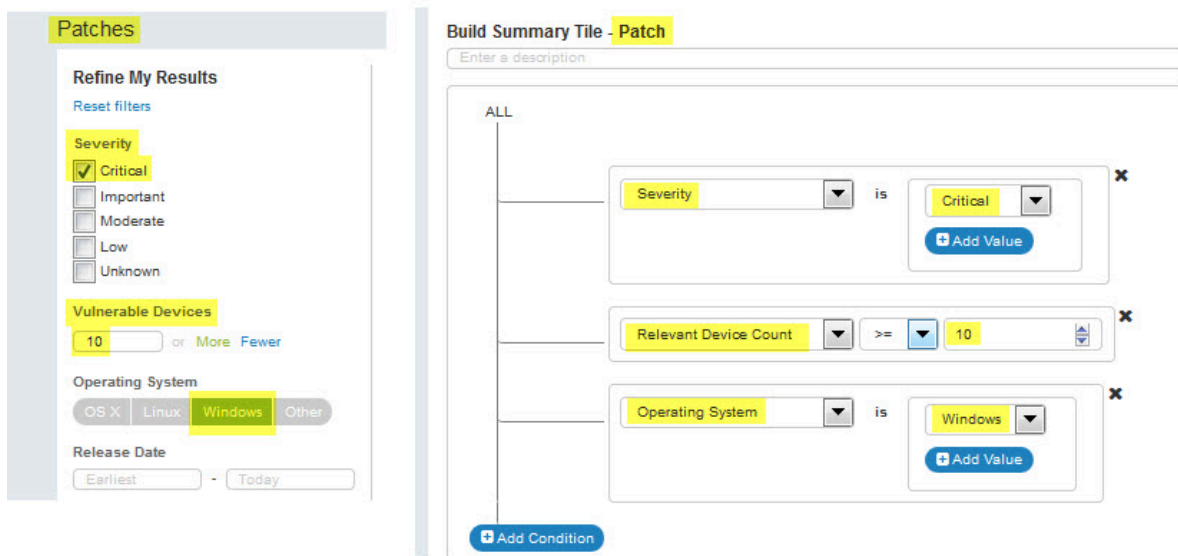
- 最上位オブジェクトのすべてのインスタンスの値 (すべてのデバイス) を表示するには、ページの左下隅で、「戻る」の隣にある「**追加**」ボタンをクリックします。
- さらにフィルターを絞り込むには (きわめて重要なパッチがあるデバイスを返す場合など)、「**条件の追加**」と「**値の追加**」をクリックします。



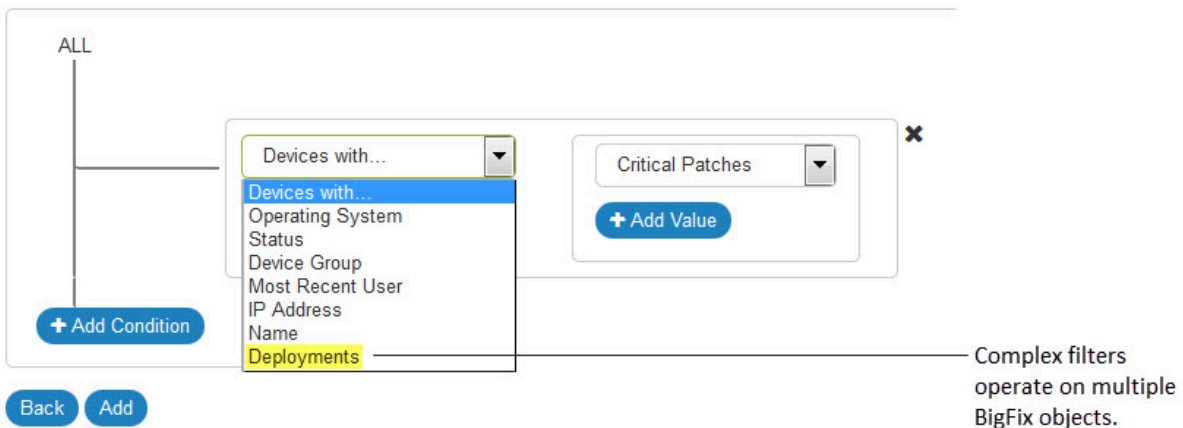
タイトル上の条件 (オブジェクト・プロパティ) とその値を操作すると、WebUI のリスト画面でフィルターを操作した場合と同様の結果が得られます。以下の図の左側の画像は、きわめて重要なパッチだけを表示するようにフィルタリングされたパッチ・リストを示しています。右側の画像は、「フィルターの定義」ページにおける同じ操作を示しています。最上位オブジェクトは「パッチ」です。条件 (オブジェクト・プロパティ) は「重要度」、重要度の値は「きわめて重要」です。



次の例は、複数のフィルターを使用する場合を示しています。左側: Windows マシンにおける脆弱性のある 10 台以上のデバイスに該当するきわめて重要なパッチを示しています。右側: タイルのフィルターにおける同じ操作を示しています。



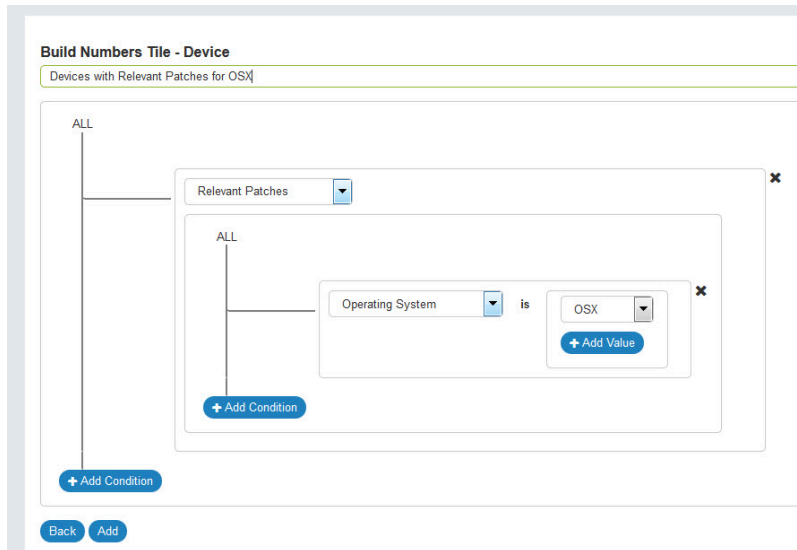
複合フィルターを使用すると、複数の上位オブジェクトに基づいてデータをタイル上に表示できます。複合フィルターは、オブジェクトの条件リストの末尾に表示されます。



各オブジェクトの複合フィルターは以下のとおりです。

- デバイス: デプロイメント
- デプロイメント: 対象デバイス、ソース・タスク、ソース・パッケージ、ソース・パッチ。
- パッケージ (ソフトウェア): デプロイメント
- パッチ: デプロイメント
- タスク (カスタム・コンテンツ): デプロイメント、対象デバイス。

複合フィルターでは、最上位オブジェクト内に条件ボックスがネストされます。



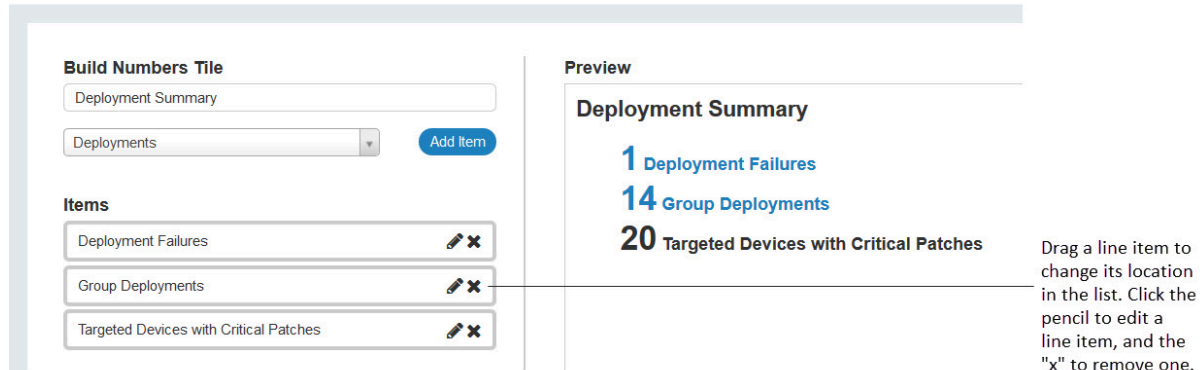
複合フィルターの処理方法の基本を理解すると、これらのフィルターを効果的に使用できます。

1. 次のような各最上位オブジェクトに対して照会が実行されます。デバイス、パッチ、ソフトウェア・パッケージ、タスク、デプロイメントのうちいずれかの組み合わせ。指定された各条件のすべてのインスタンスが検出されます。
2. 両方の照会の結果に共通する ID を使用して、両者の積集合が作成され、その結果がユーザーに返されます。例えば、デバイスに関する複合フィルターは、各オブジェクトに対して指定された条件を満たすデバイス ID のリストを作成します。次に、両方のリストに共通するデバイス ID の集合が返されます。

効率的な複合フィルターの例を以下に示します。

- 過去 5 日間に Microsoft がリリースしたきわめて重要なパッチに対して、何台の Windows 7 マシンが脆弱であるか。
- 過去 10 日間にデバイス・グループ「Watson」内のデバイスに対してオペレーター「Dexter」が実行したアクションが何件あるか。
- 2016 年 5 月 1 日から 2016 年 5 月 31 日の間に何件の Adobe ソフトウェア・パッケージのインストールが失敗したか。

タイル編集のヒント



- 「**タイルの作成**」ページで、行項目をドラッグすると、「**項目**」リスト内の順序を変更できます。行項目を削除するには、「**X**」をクリックします。
- 行項目を編集するには、鉛筆アイコンをクリックします。
- 「**フィルターの定義**」ページは、誤って同じ条件を二度選択してしまうことを防ぎます (選択された条件は、それ以降はドロップダウン・リストで非アクティブになります)。
- 複合フィルターから生成されたタイル結果はクリックできません (関連データにハイパーリンクされています)。
- 簡潔で範囲が限定されているフィルターは、より効率的に実行されます。大規模なデータ・セットを返す広範で一般的なフィルターは、時間がかかり、より多くのリソースを使用します。パフォーマンスは静的ではなく、ハードウェアの変更、エンドポイントの数の変更、オペレーターがアクセスできるデータ量など、さまざまな要因がパフォーマンスに影響する可能性があります。
- 複合フィルターが予期しない結果を返す場合は、以下を確認してください。
 - 空集合。いずれかのフィルターが 0 を返す場合 (条件を指定しなかった場合など)、その集合の積集合も 0 を返します。
 - 非常に大きな集合。いずれかのフィルターが集合内のすべてのインスタンスを返す場合 (例えば、該当するパッチがあるすべてのデバイスなど)、結果にはすべてのインスタンスが含まれます。正確ではありますが、広範すぎて無意味である可能性があります。

主要数値タイルの作成

条件を満たす各項目の合計カウントを表示するには、主要数値タイルを使用します。

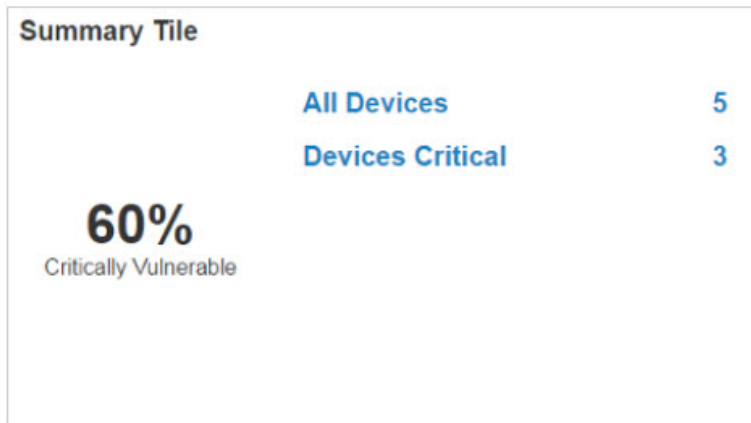


主要数値タイルを作成するには、以下のようにします。

1. 「概要」ページで、「ダッシュボードの編集」 > 「タイルの追加」 > 「カスタム・タイルの追加」の順に選択します。
2. 「リスト」を選択します。
3. タイルの名前を入力します。
4. ドロップダウン・リストから項目 (BigFix オブジェクト) を選択し、「項目の追加」をクリックします。
5. タイル上にこの行項目の説明を入力します。
6. データの条件と値 (フィルター条件) を指定します。
 - a. 「条件の追加」をクリックします。
 - i. ドロップダウン・リストから条件を選択します。
 - ii. 条件値を選択します。条件をさらに詳細化するには、「値の追加」を再度クリックします。
 - iii. 必要に応じて「条件の追加」ボタンと「値の追加」ボタンを使用し、さらに条件を指定します。
 - b. オブジェクトのすべてのインスタンス (例えばすべてのソフトウェア・パッケージなど) を含めるには、ステップ7に進みます。
7. 「追加」をクリックしてこの行項目をタイルに追加し、「タイルの作成」ページに戻ります。または、「戻る」をクリックして保存せずに終了します。
8. ステップ4から7を繰り返して、タイルに最大5つまで行項目を作成できます。「プレビュー」ペインを確認し、タイルがどのように見えるかを作成しながら確認します。各行項目をドラッグ・アンド・ドロップして再配置するか、「X」をクリックして行項目を削除します。
9. 「完了」をクリックします。「ダッシュボードの編集」ページで、新しいタイルをダッシュボードの任意の場所に移動します。

要約タイルの作成

ある項目を別の項目のパーセンテージとして表すには、要約タイルを使用します。



要約タイルを作成するには、以下のようにします。

1. 「概要」ページで、「ダッシュボードの編集」 > 「タイルの追加」 > 「カスタム・タイルの追加」の順に選択します。
2. 「要約」を選択します。
3. タイルの名前を入力します。
4. ドロップダウン・リストから項目 (BigFix オブジェクト) を選択し、「項目の追加」をクリックします。
5. タイル上にこの行項目の説明を入力します。
6. データの条件と値 (フィルター条件) を指定します。
 - a. 「条件の追加」をクリックします。
 - i. ドロップダウン・リストから条件を選択します。
 - ii. 条件値を選択します。条件をさらに詳細化するには、「値の追加」を再度クリックします。
 - iii. 必要に応じて「条件の追加」ボタンと「値の追加」ボタンを使用し、さらに条件を指定します。
 - b. オブジェクトのすべてのインスタンス (例えばすべてのソフトウェア・パッケージなど) を含めるには、ステップ7に進みます。
7. 「追加」をクリックしてこの行項目をタイルに追加し、「タイルの作成」ページに戻ります。または、「戻る」をクリックして保存せずに終了します。
8. ステップ4から7を繰り返して、タイルに最大5つまで行項目を作成できます。「プレビュー」ペインを確認し、タイルがどのように見えるかを作成しながら確認します。各行項目をドラッグ・アンド・ドロップして再配置するか、「X」をクリックして行項目を削除します。
9. タイルの要約を定義します。ドロップダウン・リストを使用して、行項目を2つ選択し、一方を他方の割合として表します。例えば、きわめて重要なパッチを含むすべてのデバイスの割合などです。要約の説明を入力します。
10. 「完了」をクリックします。「ダッシュボードの編集」ページで、新しいタイルをダッシュボードの任意の場所に移動します。

リスト・タイトルの作成

条件を満たす項目をリストするには、リスト・タイトルを使用します。

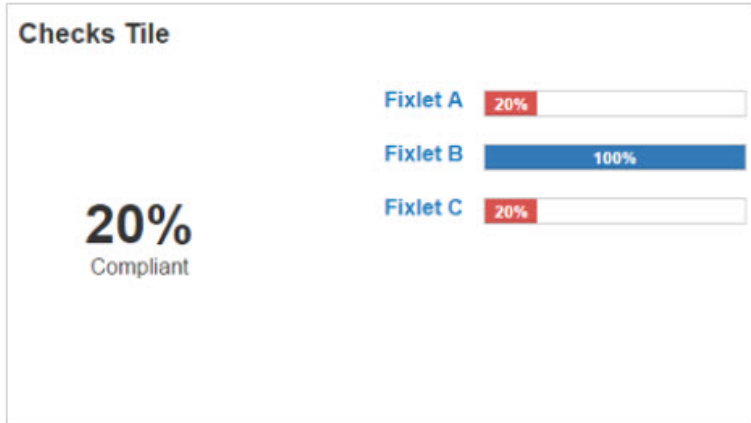
List Tile	
Patch Deployments	
Name	Issue Date
3102436: UPDATE: Microsoft .NET Framework 4.6.1 Available - Windows 7 S...	5/5/16
RHBA-2015:1993 - OpenLDAP Bug Fix Update - Red Hat Enterprise 6.0 (SE...	5/4/16
MS11-025: Vulnerability in Microsoft Foundation Class (MFC) Library Could ...	5/4/16
2515325: Windows Explorer may crash in Windows 7 or in Windows Server ...	4/28/16
3102436: UPDATE: Microsoft .NET Framework 4.6.1 Available - Windows 7 S...	4/28/16
2637518: An update is available - .NET Framework 3.5.1 - Windows 7 SP1	3/28/16
3009008: Security Advisory: Vulnerability in SSL 3.0 Could Allow Information...	3/28/16
Multiple Action Group	3/24/16
Multiple Action Group	3/24/16
UPDATE: Microsoft .NET Framework 4.6 Available - Windows Vista SP2 / Win...	3/17/16

リスト・タイトルを作成するには、以下のようにします。

1. 「概要」ページで、「ダッシュボードの編集」 > 「タイトルの追加」 > 「カスタム・タイトルの追加」の順に選択します。
2. 「リスト」を選択します。
3. タイトルの名前を入力します。
4. ドロップダウン・リストから項目 (BigFix オブジェクト) を選択し、「項目の追加」をクリックします。
5. リストの説明を入力します。
6. データの条件と値 (フィルター条件) を指定します。
 - a. 「条件の追加」をクリックします。
 - i. ドロップダウン・リストから条件を選択します。
 - ii. 条件値を選択します。条件をさらに詳細化するには、「値の追加」を再度クリックします。
 - iii. 必要に応じて「条件の追加」ボタンと「値の追加」ボタンを使用し、さらに条件を指定します。
 - b. オブジェクトのすべてのインスタンス (例えばすべてのソフトウェア・パッケージなど) を含めるには、ステップ7に進みます。
7. 「リストのソート基準」フィールドでソート・オプションを選択します。
8. 「追加」をクリックしてタイトルにリストを追加し、「タイトルの作成」ページに戻ります。または、「戻る」をクリックして保存せずに終了します。
9. 必要に応じてステップ4から8を繰り返し、このタイトルにさらにリストを作成します。複数のリストがあるタイトルをプレビューするには、「プレビュー」ペインのボタンを使用して表示するリストを選択します。同様のコントロールが、完成したタイトルで複数のリストから選択するのに使用されます。
10. 「完了」をクリックします。「ダッシュボードの編集」ページで、新しいタイトルをダッシュボードの任意の場所に移動します。

チェック・タイルの作成

特定のパッチとカスタム・コンテンツ (タスクとベースライン) に対するデバイスのコンプライアンスを追跡するには、チェック・タイルを使用します。



各バーのパーセンテージは、一意の非該当デバイスの数をデバイスの総数で除算することで計算されます。タイルの合計は、一意の非該当デバイスの数を、タイル上のすべての行項目のデバイスの総数で除算することで計算されます。例えば、図示されているサンプル・タイルでは、すべてのデバイスのうち 20% が Fixlet A、B、および C に準拠しています。

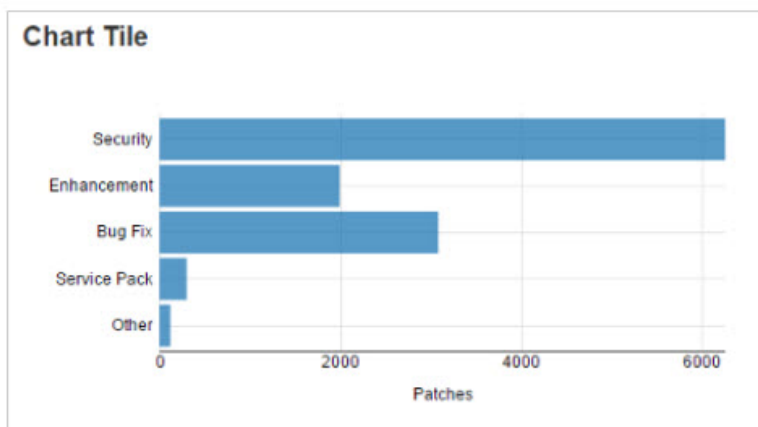
チェック・タイルを作成するには、以下のようにします。

1. 「概要」ページで、「ダッシュボードの編集」 > 「タイルの追加」 > 「カスタム・タイルの追加」の順に選択します。
2. 「チェック」を選択します。
3. タイルの名前を入力します。
4. ドロップダウン・リストから「パッチ」または「カスタム項目」を選択し、「項目の追加」をクリックします。
5. タイル上にこの行項目のラベルを入力します。
6. この項目のコンプライアンスしきい値を選択します。コンプライアンス率はパーセンテージで表され、しきい値以上のものはタイル上に青で表示されます。しきい値より低いコンプライアンス率はタイル上に赤で表示されます。デフォルトは 80% です。
7. パッチまたはタスク名の上にマウスを移動し、「選択」ボタンを表示します。「選択」をクリックし、タイルにコンプライアンス行項目を追加します。特定のパッチ、タスク、またはベースラインを見つけるには、その名前を「検索」ボックスに入力します。リスト内の名前をクリックし、その文書を別のブラウザ・ウィンドウで開きます。

8. ステップ 4 から 7 を繰り返して、タイルに最大 5 つまでコンプライアンス行項目を追加できます。「**プレビュー**」ペインを確認し、作業しながらチェック・タイルの設計を確認します。「**タイルの作成**」ページで、各コンプライアンス行項目をドラッグして再配置するか、「**X**」をクリックして行項目を削除します。
9. 「**完了**」をクリックします。「**ダッシュボードの編集**」ページで、新しいタイルをダッシュボードの任意の場所に移動します。

グラフ・タイルの作成

さまざまなコンポーネントのデータを視覚的に表現するには、グラフ・タイルを使用します。



「**フィルターの定義**」ページで棒グラフを操作する際は、「**条件の追加**」ボタンと「**値の追加**」ボタンを使用して、グラフ用データの収集から始めます。次に、「**棒グラフの設定**」ペインの各フィールドを使用して、そのデータのコンポーネントを視覚的に表します。「**棒グラフの作成基準**」フィールドは、フィルターで使用される条件が誤って重複してしまうことを防ぐために、重複する条件をドロップダウン・リストで無効にします。

棒グラフを作成するには、以下のようになります。

1. 「**概要**」ページで、「**ダッシュボードの編集**」 > 「**タイルの追加**」 > 「**カスタム・タイルの追加**」の順に選択します。
2. 「**グラフ**」を選択します。
3. タイルの名前を入力します。
4. ドロップダウン・リストから項目 (BigFix オブジェクト) を選択し、「**棒グラフの設定**」をクリックします。
5. グラフのデータの条件と値 (フィルター条件) を指定します。
 - a. 「**条件の追加**」をクリックします。
 - i. ドロップダウン・リストから条件を選択します。
 - ii. 条件値を選択します。条件をさらに詳細化するには、「**値の追加**」を再度クリックします。
 - iii. 必要に応じて「**条件の追加**」ボタンと「**値の追加**」ボタンを使用し、さらに条件を指定します。
 - b. オブジェクトのすべてのインスタンス (例えばすべてのソフトウェア・パッケージなど) を含めるには、ステップ 6 に進みます。

6. 「**棒グラフの設定**」 ペインで、「**棒グラフの作成基準**」 ドロップダウン・リストからグラフのカテゴリを選択します。例えば、パッチのカテゴリには“**重要度**”、“**オペレーティング・システム**”、“**発行日**”、“**カテゴリ**”および“**名前または ID**”が含まれています。
7. 「**棒グラフの追加**」 ボタンをクリックし、そのカテゴリの値の棒グラフを作成します。例えば、パッチの重要度を示すグラフには、“**きわめて重要**”、“**重要**”、“**普通**”、“**低**”、および“**不明**”のバーを作成します。バーの値の右側にあるフィールドに名前を入力して、バーにラベルを付けます。バーを削除するには、「**X**」をクリックします。
 - バーの名前は固有でなければなりません。
 - 日付範囲を指定するには、バー・フィールド内をクリックしてカレンダーを表示し、開始日と終了日を選択します。
 - “**発行者**”の値を入力する場合は、オペレーターの BigFix ユーザー名を入力します。
8. 「**追加**」をクリックしてタイルにグラフを追加し、「**タイルの作成**」ページに戻ります。または、「**戻る**」をクリックして保存せずに終了します。
9. 「**タイルの作成**」ページで、各バーをドラッグして再配置するか、「**X**」をクリックしてバーを削除します。「**プレビュー**」ペインで変更を確認します。
10. タイル・タイトルの下フィールドに、グラフの X 軸の説明を入力します。
11. 「**完了**」をクリックします。「**ダッシュボードの編集**」ページで、新しいタイルをダッシュボードの任意の場所に移動します。

第 8 章. パフォーマンス

この章では、WebUI で発生することがあるパフォーマンス問題を管理するツールをいくつか紹介します。計画立案、モニタリング、および保守を含む、BigFix と WebUI のパフォーマンスに関するトピックとツールの詳細については、『[BigFix キャパシティー・プランニング・ガイド](#)』を参照してください。

パフォーマンスを最適化するために、WebUI サービスを専用マシンにインストールしてください。BigFix サービスと WebUI データベースを 1 台のマシンで実行すると、応答時間が長くなります。

ユーザー権限の最適化

WebUI でマスター以外のオペレーターが同様の権限を持っている場合、WebUI はそれを利用して、キャッシュに共有値を使います (「[キャッシュ](#)」セクションを参照ください)。

具体的にはマスター以外のオペレーターが次に関して同一の権限を持っている場合:

- 表示可能なサイト
- 表示可能なコンピューター
- 割り当て済みの役割

マスター以外のオペレーターはキャッシュを共有できます。したがって、WebUI のパフォーマンスを最適化するためのベスト・プラクティスとして、デプロイメントはグループと役割で定義された権限を持つマスター以外のオペレーターのグループを保持することをお勧めします。個別のオペレーター、個別のサイト、コンピューターの権限を割り当てないようにします。また、コンテンツをできる限り個別のオペレーター・サイトに割り当てないようにします。

オペレーターのパフォーマンス

オペレーター関連の遅延を最小限に抑えるには、以下の手法を使用します。

- オペレーター負荷のバランスを取る - 同時性 (WebUI を同時に使用しているオペレーターの数) がパフォーマンスに影響を及ぼすことがあります。多数のオペレーターが WebUI を同時に使用すると、応答時間が長くなる場合があります。オペレーターを効果的にスケジューリングし、同時に使用するオペレーターの負荷をサポートするために十分なシステム・リソースを確保すると、この遅延を最小限に抑えられます。オペレーターが応答時間の遅れを感じている場合、いったん作業から離れて、システム負荷が下がったときに WebUI の作業に戻ると問題が解決する場合があります。この問題が続く場合、オペレーターと役割を調整すると役に立つ場合があります。
- オペレーター・アクセスの調整 - オペレーターによるコンテンツとエンドポイントへのアクセスを管理すると、システム負荷を軽減できます。BigFix のオペレーターと役割の権限を使用して、個々のオペレーターの特定コンテンツ、特定エンドポイント、またはその両方に対するアクセスを制限します。例えば、あるオペレーターが Windows エンドポイントなど、特定のエンドポイントのセットにのみかかわっている場合、それ

に合わせて役割を定義します。調整によって、プロセスのオーバーヘッドを著しく削減できる場合があります。

- 無関係なコンテンツを削除する - 不要なコンテンツを削除することも、サーバー負荷の大幅な軽減につながります。

環境のアップグレード

『BigFix キャパシティ・プランニング・ガイド』には、WebUI に割り当てられるリソースのバランスと正常性が保たれるようにする CPU 割り当て、CPU スケーリング、仮想化、およびシステムの計画と保守に関するその他の多くの側面についての指針が提供されています。例えば、システム・モニタリングを使用して、システム・ストレスの原因がオペレーターの作業負荷によるものか、リソースの割り振りが不適切であるためかを判別します。

データベース管理

WebUI が正常に稼働するには、データベースの保守がきわめて重要です。プラットフォームに固有の情報とツールについては、『BigFix キャパシティ・プランニング・ガイド』を参照してください。

1. バックアップ - バックアップはデータベース・リカバリーのための確立されたベスト・プラクティスです。すべての BigFix インストール済み環境では、障害発生時のリカバリーのニーズに対処するために、適切なバックアップ・ポリシーを準備しておく必要があります。
2. データベース再編成 - 常時使用すると、データベース内の情報が著しく分散することがあり、テーブルと索引は時間が経つにつれてフラグメント化します。ご使用のプラットフォームの再編成ツールを使用してスペースを再利用すると、照会の効率性が確保されます。
3. データベース統計 - データベース統計によって、DBMS 最適化プログラムではデータベース・アクセス計画において適切な選択が行われます。BigFix データベースにはコストに基づく最適化プログラムがあります。この最適化プログラムは、データベース統計を使用して、最も効率的に照会を実行する方法を判別します。統計が正しく保守されていない場合、非効率な照会計画が作成され、WebUI のパフォーマンスが低下します。ご使用のプラットフォームのツールを使用して、これらの統計情報を保守してください。

キャッシング

キャッシュは WebUI の応答時間を短縮するために使用します。キャッシュ・データのプロセス、格納、更新が特定の間隔で実行されます

(ほとんどの WebUI データはリアルタイムで表示されますが、適用デバイス数など一部の WebUI カウンターでは複雑な計算が必要です)。処理時間はデバイス・カウントの増加に合わせて増加し、大規模デプロイメントは影響を受ける場合があります。以下の値がキャッシュされます。

- デバイス・リストに示される適用可能なパッチ数
- 以下に示される適用可能なデバイス・カウント:
 - パッチ・リスト
 - ソフトウェア・パッケージ・リスト
 - カスタム・コンテンツ・リスト
 - 個々のパッチ、ソフトウェア、およびカスタム・コンテンツに対する文書の概要

- 進行中のデプロイメント・カウント:
 - コンテンツ・リスト
 - カスタム・コンテンツ・リスト
 - パッチ・リスト
- デバイス・リストのデプロイメント情報

_WebUIAppEnv_SP_QUEUE_CONCURRENT 「_WebUIAppEnv_SP_QUEUE_CONCURRENT」設定も WebUI キャッシュに影響します。ユーザーの WebUI 閲覧中にキャッシュ値を更新するバックグラウンドのアプリごとに、同時実行されるストアド・プロシージャの数を制限します。デフォルト値は 5 です。

キャッシュされた値にはフラグが立てられます。例えば、デバイス・リストの関連パッチ数に次のメッセージが表示されることがあります。“「最後の更新は 4 分前です。最新データを確認するにはここをクリックします」”ブラウザを更新すると、キャッシュから最新のデータが取得されます。

デフォルトの更新間隔は 10 分です。この間隔はキャッシュ存続時間 (TTL) の値とも呼ばれ、キャッシュ結果が無効になる頻度を決定します。キャッシュの新しさと応答時間に与える影響のトレードオフとして、10 分が妥当と考えられています。

この間隔を変更するには、クライアント設定 **_WebUIAppEnv_CACHE_TTL** を使用します。TTL 値を変更するには、システム負荷とオペレーターの並行性について深く理解する必要があり、構成のモニターと調整に意欲的な管理者にのみお勧めします。必要な間隔を秒単位で入力します。デフォルトの間隔は 600、最小の間隔は 180 (3 分) です。

キャッシュ更新の期間を長くするには、間隔を増やします。アクティビティーの多い、大規模なデプロイメント環境を使用するお客様については、間隔を長くすると、更新を少なくしてシステム・リソースへの影響を抑えられます。適用可能カウントを変更するアクティビティーは、より多くのリソースを消費します。適用可能カウントを変更するアクティビティーには、以下のものがあります。

- BigFix に報告するデバイス数を増やす。
- 火曜日にパッチを適用するなどの短期集中的なパッチ活動。

第 9 章. ログの場所

すべての WebUI のログは、1 つのデフォルトの場所に保管されます。ログは WebUI サーバーの以下の場所に保管されます (サーバー設定 `_WebUI_Logging_LogPath` によって変更された場合を除く)。

Windows デプロイメント

```
c:\Program Files (x86)\BigFix Enterprise\BES Server\WebUI\Logs\
```

Linux デプロイメント

```
//var/opt/BESServer/WebUI/Logs/
```

WebUI プロセスのスタートアップ情報が含まれる、WebUI ディレクトリー内の追加ログ。

```
service-wrapper.log
```

ログ・ファイルの詳細度に加えて、ログが書き込まれる場所を変更できます。これらのオプションを実行するには、[WebUI サーバー設定 \(ページ 56\)](#)の説明に従って、いくつかのサーバー設定を作成または編集します。これらの設定は、ほとんどの場合は変更すべきではなく、非常に特殊な状況の場合に限って変更してください。

第 10 章. WebUI サーバー設定

WebUI の詳細を制御するには、WebUI サーバーでサーバー設定を作成または変更します。これらの設定は、パフォーマンスが最大となるよう動作を調整したり問題のトラブルシューティングを行ったりするために上級ユーザー専用を提供されています。

一般に、これらの設定は具体的に必要でない限り変更しないでください。これらの設定の一部は、ご使用のデプロイメントの動作とパフォーマンスに非常に大きな影響を与えます。

これらの設定を適用するには、**BesRootServer** サービスを再起動する必要があります。

WebUI サーバー設定へのアクセス

WebUI サーバー設定には、BigFix コンソールを通じて WebUI サーバーの機能としてアクセスします。

WebUI サーバーを見つけるために、「すべてのコンテンツ」 > 「コンピューター」の順にナビゲートします。目的のサーバーを選択して右クリックします。「コンピューター設定の編集」を選択して「設定の編集」ダイアログ・ボックスを表示します。サーバー設定の追加または編集についての詳しい説明は、「[BigFix コンソール・オペレーター・ガイド](#)」を参照してください。

サーバー設定は以下のフォーマットで記述されます。

```
<server_setting_name>=<value>
```

「追加」または「編集」をクリックして、新規サーバー設定を作成または編集します。すべてのサーバー設定名はアンダースコアで始まります。WebUI の設定を適用するには、WebUI サービスを再起動する必要があります。

サーバー設定の定義

WebUI サーバー設定の定義を以下に示します。デフォルト設定がある場合には、その旨が記載されています。設定にデフォルトがない場合、パラメーターをユーザーが作成しない限り、そのパラメーターが BigFix コンソールに表示されない場合があります。



注: これらの設定を有効にするには、WebUI サービスを始動させる必要があります。

_WebUIAppEnv_WEB_COOKIE_MAX_AGE_MINUTES WebUI のセッション Cookie が有効な状態を維持する時間 (分単位) を指定します。その時間が経過すると、WebUI のセッション Cookie が期限切れになります。デフォルト値は 60 分です。

_WebUIAppEnv_MSSQL_CXN_ENCRYPT スtring値 ¹ は、ユーザーの MSSQL Server が、「Forced Encryption」または Azure Cloud 仮想マシンへの接続を介してすべてのトラフィックを暗号化するように設定されていることを示します。デフォルトは ⁰ です。

_WebUIAppEnv_WEB_CIPHERS WebUI を開始するために使用する Web 暗号のセットです。詳しくは、https://wiki.mozilla.org/Security/Server_Side_TLS を参照してください。暗号リストはコロンで区切る必要があります。例:


```

ECDHE-RSA-AES128-GCM-SHA256:ECDHE-ECDSA-AES128-GCM-SHA256:ECDHE-RSA-AES256-GCM-SHA384:
ECDHE-ECDSA-AES256-GCM-SHA384:DHE-RSA-AES128-GCM-SHA256:ECDHE-RSA-AES128-SHA256:
DHE-RSA-AES128-SHA256:ECDHE-RSA-AES256-SHA384:DHE-RSA-AES256-SHA384:ECDHE-RSA-AES256-SHA256:
DHE-RSA-AES256-SHA256:HIGH:!aNULL:!eNULL:!EXPORT:!DES:!RC4:!MD5:!PSK:!SRP:!CAMELLIA:
!kRSA:!DSS:!DSA

```

_WebUIAppEnv_APP_PORT WebUI で使用されるポートを構成します。SAML を使用する場合、必ず BigFix サーバー・コンピューターの `_WebUI_Monitor_Port` キーを同じポートに設定してください。

_WebUIAppEnv_APP_PORT_MIN 高速アプリケーションで使用する最小ポート範囲を設定します (bfappmonitor によって設定)。

_WebUIAppEnv_APP_PORT_MAX 高速アプリケーションで使用する最大ポート範囲を設定します (bfappmonitor によって設定)。

_WebUIAppEnv_CACHE_TTL 秒単位の値です。キャッシュした時刻と現在時刻の差が `AppEnv_CacheTTL` (秒) を超えたとき、データ同期機能は `WebUI.COMPUTED_FIXLET_COUNTS`、`WebUI.COMPUTED_DEVICE_COUNTS`、`Webui.SWD_COMPUTED_FIXLET_COUNTS`、および `Webui.CUSTOM_COMPUTED_FIXLET_COUNTS` 内のデータを無効にします。**_WebUIAppEnv_CACHE_TTL** が設定されていないか、設定が無効な場合、値はデフォルトの 600 になります。`CACHE_TTL` が経過した場合にデータ同期機能が検査するポーリング間隔は 60 秒であるため、`CACHE_TTL` の最小時間は 60 秒です。実際の無効化が起こるのは、`CACHE_TTL` 秒から `CACHE_TTL+60` 秒までの間の任意の時間です。最小値は 180 です。それより低い値はデフォルトで 180 に設定されます。

_WebUIAppEnv_LOGIN_CACHE_TTL_HOURS 時間単位の値です。この値は、キャッシュを再び取り込むかどうかを判断するためにログイン時に使用されます。デフォルトは 24 時間で、最小は 1 時間です。上限はありません。

_WebUIAppEnv_NOTIFICATION_EXPIRATION_DAYS WebUI 経由で対象デバイスに送信したメッセージの有効日数を入力します。これに従い、メッセージは自動的に対象デバイスの SSA メッセージのタブから削除されます。デフォルト値は 3 日です。

_WebUIAppEnv_SAML_ONLY 1 に設定すると、WebUI が SAML 専用モードでのみ実行されるようになります。共通アプリケーションとログイン・アプリケーションを除く他のすべてのアプリケーションを無効にし、WebUI が SAML を構成することは許可しますが、他のすべてを実行することを許可しません。

_WebUIAppEnv_SAML_SSO_ENABLE 1 に設定すると、SAML での Web ベースのシングル・サインオン (SSO) 認証方式が有効になります。フラグが設定されていない場合、デフォルト値は「無効」です。

_WebUIAppEnv_SAML_AUTHNCONTEXT SAML 交換で指定される認証コンテキストを定義します。一般的に、許容値は SAML 2.0 仕様のセクション 3.4 にリストされていますが (<https://docs.oasis-open.org/security/saml/v2.0/saml-authn-context-2.0-os.pdf>)、値は使用される SAML Identify Provider (IdP) によって許可および解釈される必要があります。ほとんどすべての IdP は、仕様にリストされている値のサブセットを受け入れますが、IdP 独自の追加の値を持つこともあります。ご使用の IdP の資料を参照して、環境に必要な値を確認してください。(例えば、ADFS の場合は、<https://msdn.microsoft.com/en-us/library/hh599318.aspx> を参照)。設定されていない場合は、`urn:oasis:names:tc:SAML:2.0:ac:classes:PasswordProtectedTransport` が使用され、その結果、ユーザー名および

パスワードの入力が必要なフォームベースの認証になります。スマート・カードを使用した 2 要素認証の場合、ほとんどの IdP では `urn:oasis:names:tc:SAML:2.0:ac:classes:TLSClient` または `urn:federation:authentication:windows` の使用が必要です。

`_WebUIAppEnv_QueryOnly` ¹ に設定すると、WebUI が Query 専用モードで実行されるようになります。共通アプリケーションとログイン・アプリケーションを除く他のすべてのアプリケーションを無効にし、WebUI が Query を構成することは許可しますが、それ以外を許可しません。

`_WebUIAppEnv_ENABLE_WEBUI_METRICS` 値が 1 の場合、すべての WebUI 経路要求のロギングをオンにします。runapps の場合のデフォルト・ロケーション: `<app>/app/dev.out` production/site の場合: `<app>/dev.out`

`_WebUIAppEnv_METRICS_PATH` `ENABLE_WEBUI_METRICS` フラグが有効になっている場合のパスを指定します。そのパスに SQL ファイルおよびメトリックの詳細が生成されます。デフォルト: `<app>/app/dev.out` (runapps の場合) または `<app>/dev.out` (production/site の場合)

`_WebUIAppEnv_APP_UPDATE_ENABLE_AUTO` ¹ に設定すると、WebUI アプリケーションが、保留サイト・キャッシュにある最新バージョンに自動的に更新されます。0 に設定すると、自動更新は無効になります。デフォルトでは、自動更新は有効になっています。

`_WebUIAppEnv_APP_UPDATE_DELAY_DAYS` 新しいサイト・バージョンがリリースされると、WebUI はこの日数だけ待機してから、現在実行中のバージョンを置き換えます。自動更新が有効な場合にのみ適用されます。デフォルトは 0 です。

`_WebUIAppEnv_LOGIN_SESSION_TIMEOUT_SECONDS` 無操作状態のために、ユーザーが WebUI からログアウトされるまでの時間を指定します。デフォルトのタイムアウトは 900 秒 (15 分) です。

`_WebUIAppEnv_PLATFORM_HOST` この値は、インストール時にマストヘッドで指定されたホスト名を使用して設定されます。プライマリー以外のサーバーに WebUI をデプロイする場合に、この設定を変更し、セカンダリー・サーバーに接続するよう WebUI ホスト・マシン上でクライアント設定を構成します。

`_WebUI_Logging_Filter` このパラメーターの値は、ログに記録するイベントをフィルタリングする正規表現です。デフォルトは `bf*error,bf:bfetl:debug,bf:bfapp:debug,bf:appmonitor:debug,bf:datasync:initialize:debug` です。すべての BigFix イベントの詳細ロギングを有効にするには、`bf*` を使用します。サード・パーティー・アプリケーションを含むすべてのデバッグ・イベントをログに記録するには、単純に `*` を使用します。

`_WebUI_Logging_LogPath` この値は、サービス・アプリケーション・ログの完全ファイル・パスを定義します。また、他のすべてのログが書き込まれるディレクトリーも定義します。デフォルト値は `<server_dir>/WebUI/logs/service-app.log` です。この値が例えば `<server_dir>/bananas/fruit.log` に変更された場合、サービス・アプリケーション・ログの名前は `fruit.log` になります。ただし、他のログはすべてデフォルト名を維持しますが、`<service_dir>/bananas/` に書き込まれます。サービス・アプリケーション・ログ以外のログの名前を定義することはできないことに注意してください。

`_WebUI_Logging_LogMaxSize` 各ログ・ファイルの最大サイズをバイト単位で定義します。デフォルトは 5,242,880 (5 MB: $5 \times 1024 \times 1024$) です。ログ・ファイルが、ここに設定された制限を超過すると、2 番目のログ・ファイルが作成されます。これは 10 個のログ・ファイルが作成されるまで続き、その時点で、最初のログ・ファイルがオーバーライドされます。したがって、各ログの最大ログ・ファイル・サイズは、ここに定義した値の 10 倍になります。使

用方法によっては、各 WebUI アプリケーションのログ・ファイルは、大きく異なるレートで書き込まれる場合があります。このパラメーターは、すべてのログ・ファイルのサイズを定義します。

_WebUI_HTTPS_Port このパラメーターは、HTTPS で使用するポートを定義します。デフォルトは 443 です。このパラメーターは、WebUI の使用可能化の際に Fixlet 2252 により書き込まれます。この値を変更するには、Fixlet 2250 をいつでも使用できます。

_WebUI_Redirect_Port このパラメーターは、ポート 80 を使用しない場合に WebUI で使用する HTTP ポートを定義します。この設定は、デフォルトでは存在しません。80 以外のポートが必要な場合、このパラメーターを **_WebUI_Redirect_Enable** と併せて定義する必要があります。Fixlet 2252 および 2250 で、80 以外のポートを定義する際に、このパラメーターが定義され、有効化されます。

_WebUI_Redirect_Enable HTTP ポート・アクセスを制御します。HTTPS ポートにリダイレクトしたくない場合は、この設定を使用します。この設定はデフォルトでは存在しないため、HTTP ポート・アクセスが可能です。HTTP ポート・アクセスを無効にするには、設定値は 0 でなければなりません。このパラメーターは、**_WebUI_Redirect_Port** 設定と連携して動作します。

_BESRelay_WebUISiteGather_IntervalMinutes WebUI サーバーが HCL により公開されたサイトを収集する頻度を定義します。タイトルが示すとおり、この変数はサイトの更新の間隔 (分) を表す整数です。デフォルトは 5 です。

_BESRelay_WebUISiteGather_Schedule WebUI サーバーが HCL により公開されたサイトを収集する繰り返し時刻を定義し、「**_BESRelay_WebUISiteGather_IntervalMinutes**」の設定をオーバーライドします。間隔を以前変更した場合には、デフォルトの 5 分に変更しておくことがベスト・プラクティスです。次のように大/小文字の区別がある形式で、コンマ区切り値を入力します。<Day>:<hh:mm> (<Day> = Mon, Tue, Wed, Thu, Fri, Sat, or Sun、<hh:mm> は 24 時間表記を使用)。例えば、以下の値は、サイトの更新を、毎週日曜日の午前 9 時、毎週土曜日の正午、および毎週金曜日の午後 10 時 30 分にスケジュールします。 `_BESRelay_WebUISiteGather_Schedule=Sun09:00,Sat12:00,Fri22:30`

_WebUI_HTTPS_StrictTransportSecurity この設定は、ブラウザが HTTP を使用して WebUI に接続しないようにし、HTTPS を優先させます。デフォルト値は 0 です。このセキュリティ機能を有効にするには 1 に設定します。

_WebUIAppEnv_ENABLE_WEBUI_METRICS この設定は 1 の値で有効化できます。この設定の主な利用者は WebUI 開発者です。管理者にとってはほとんどの状況で意味がありません。

_WebUIAppEnv_APP_RESTART_DELAY_SECONDS この設定は、何らかの理由で停止したアプリケーションがある場合に、アプリケーション・モニターがアプリケーションの再始動を試行するのを待機する秒数を定義します。

_WebUIAppEnv_DEPLOYMENT_DOC_REFRESH_RATE_MS この設定は、デプロイメント文書でデプロイメント状況を更新する頻度を制御します。デフォルトでは、デプロイメント状態の更新は無効になっています。

_WebUIAppEnv_SP_QUEUE_CONCURRENT この設定は、WebUI がバックグラウンドで常時許可するアプリごとのストアード・プロシージャの数を制限します(パフォーマンス向上のため)。ユーザー・ログインのキャッシュ要求は、キューを無視して即座に実行されます。最小値およびデフォルト値は 5 です。

_WebUIAppEnv_LANG このクライアント設定は、WebUI ノード・プロセスの LANG 環境変数を設定します。この設定は、デフォルトでは存在しません。WebUI が Linux マシンにインストールされている場合は、LANG 環境変数はノード・プロセスにデフォルト設定されません。そのため、ローカライズされたメッセージの一部が正しく表示

されません。LANG 環境変数を設定するには、このパラメーターを定義し、優先言語を、例えば日本語の場合は、「**ja_JP.UTF-8**」と設定する必要があります。

_WebUIAppEnv_ENABLE_INLINE_REPORTING このクライアント設定は、インライン・レポート作成機能を有効にします。WebUI が BigFix プラットフォームのバージョン 10 未満で実行されている場合、インライン・レポート作成機能はデフォルトでは有効になっていません。この機能を有効にするには、このパラメーターを 1 に設定する必要があります。

_WebUIAppEnv_MAX_FILTERS_NUMBER この設定では、デバイス・リスト ((ページ)) ページに適用できる同時フィルターの最大数を指定します。この制限を超えると、パフォーマンスに影響を与える可能性があることを警告するメッセージがユーザーに表示されます。デフォルト値は 5 です。

第 11 章. SAML 2.0

BigFix は SAML 2.0 をサポートしています。SAML 認証は、構成された ID プロバイダー (IdP) を使用してユーザーを認証するアプリケーション・ログイン・メカニズムです。

SAML 認証のサポートは BigFix プラットフォームの機能である一方、SAML 構成は WebUI により実装されます。SAML を活用するには、デプロイメント環境で WebUI を有効化する必要があります。WebUI は SAML をセットアップせずに使用でき、SAML は WebUI アプリケーションを使わずに使用できます。

WebUI コンポーネントの完全なセットを有効化することなく SAML 認証をアクティブにするには、WebUI を SAML 専用モードで開始します。

SAML 専用モードでの WebUI の有効化

SAML 専用モードで WebUI を開始すると、WebUI アプリケーションの完全なセットを有効にすることなく SAML 認証をアクティブにすることで、リソースの消費を最小限に抑えられます。SAML 専用モードでは、BigFix WebUI、BigFix Web レポート、および BigFix コンソールで SAML 認証を有効化するために必要なプロセスのみが作成されます。その他のすべての WebUI 機能 (「SAML 管理」ページを除く) は使用不可です。



注: SAML を WebUI アプリケーションの全機能と合わせて使用するには、SAML 専用モードを使用しないでください。代わりに、以下に列挙した手順のステップ 3 で説明している標準的な有効化手順を使用します。

SAML 専用モードで WebUI を開始するには、コンピューター設定 `_WebUIAppEnv_SAML_ONLY` と「SAML 管理」ページを使用します。以下は、BigFix マスター・オペレーターとして SAML 専用モードで WebUI を有効化する手順です。

1. BigFix コンソールを開き、「すべてのコンテンツ」ドメインを選択して、「コンピューター」を選択します。BigFix サーバー名をクリックして、「コンピューター設定の編集」を選択します。
2. コンピューター設定 `_WebUIAppEnv_SAML_ONLY` がまだリストにない場合は、この設定を「設定」リストに追加して、その値を `1` に設定します。
 - a. 「設定の編集」から「追加」をクリックして「カスタム設定の追加」ダイアログを開きます。
 - b. 「設定名」フィールド・タイプ: `_WebUIAppEnv_SAML_ONLY`
 - c. 「設定値」フィールド・タイプ: `1`
 - d. 「OK」をクリックします。



注: 設定 `_WebUIAppEnv_SAML_ONLY` が既に存在しているものの、`0` (無効) に設定されている場合は、値を `1` に変更します。

3. まだ有効化されていない場合は、インストール手順に従って WebUI を有効にします。既に WebUI を有効にしている場合は、WebUI サービスを再起動して変更をアクティブにします。
4. WebUI を別のリモート・サーバーにインストールする際に、SAML が正常に動作するようにするには、BigFixサーバー・コンピューターの `_WebUI_AppServer_Hostname` キーを WebUI のインストール先コンピューターのホスト名に設定する必要があります。

5. WebUI にログインします。WebUI URL をブラウザ・ウィンドウに入力して、`/login` ページを表示します。資格情報が認証されると、「SAML 管理」ページ (`/administrator`) が表示されます。
6. 「SAML 管理」ページで SAML 構成設定を入力し、「有効化」をクリックします。



注: Web レポートの SAML 認証を有効化するには、Web レポートで SSL を有効にする必要があります。(これは、WebUI が標準モードでも SAML 専用モードでも必須です。)

7. BES ルート・サーバー、Web レポート・サーバー、WebUI サービスを再起動して、プロセスを完了します。これで SAML 認証は、Web レポート、BigFix コンソール、および WebUI の SAML 専用モードで有効になりました。

WebUI のインストール後に、完全な WebUI モードから SAML 専用モードに切り替えるだけの場合は、`_WebUiAppEnv_SAML_ONLY` 設定を `1` に設定して、BES ルート・サーバー・サービスと WebUI サービスを再起動し、変更を有効にします。

`_WebUiAppEnv_SAML_ONLY` が存在しないか、`0` に設定されている場合、SAML 専用モードは有効ではありません。

WebUI 構成に影響を与える使用可能な設定について詳しくは、[WebUI サーバー設定 \(\(ページ\) 56\)](#)の説明を参照してください。

注:

- SAML 専用モードにおいて、`/login` を WebUI URL に付加すると、標準の WebUI ログイン・フォームが表示されます。
- (SAML または `/login` ページのいずれかを使用して) WebUI にログインすると、ユーザーは「SAML 管理」ページにリダイレクトされます。このページで、マスター・オペレーターは SAML 設定を構成できます。マスター以外のオペレーターの場合は「403 (禁止)」メッセージが表示され、SAML 構成を参照することも編集することもできません。
- ユーザーがログインした後に `/` URL に手動でアクセスしようとすると、空の WebUI ダッシュボードが表示されます。「ホーム」コントロールと「ログアウト」コントロールのみがアクティブになります。ログアウトすると、ログインに使用した方式とは関係なく、ユーザーは「再認証」ページにリダイレクトされます。その他のすべてのナビゲート可能な WebUI URL (`/`と「SAML 管理」ページを除く)は、「アクセス禁止」メッセージを返します。

第 12 章. トラブルシューティング

WebUI アプリケーションの使用における既知の問題についての情報は、こちらのセクションを確認してください。

WebUI アプリケーション使用時にオペレーターが直面する可能性がある問題のトラブルシューティングには、以下のトラブルシューティングのヒントを確認してください。

BigFix データベースへの接続を確立できません

WebUI アプリケーションは最初のインストールで WebUI の構成詳細セットアップを適切に使用して BigFix Enterprise への接続を試みます。場合によっては、通信に失敗することがあります。以下の理由が示されます。

- データベース・サービスが到達不能である場合 (マシンの電源がオフになっている、ファイアウォールの例外が許可されていない)。
- データベースとの通信に使用されている資格情報の有効期限が切れている、または変更されている場合。
- BigFix Enterprise と通信するよう設定されているユーザーの権限が取り消されている、または変更されている場合。

通信に失敗した場合、WebUI アプリケーションは以下のメッセージを表示します。



注: WebUI が MSSQL にデプロイされている場合は、オペレーターにはデータベース構成テスターウィザードが表示されます。WebUI が DB2 にデプロイされている場合は、オペレーターにデータベース構成テスターウィザードは表示されず、オペレーターは BES サポート Fixlet 2687 を使って、データベース接続の問題を解決する必要があります。



重要: WebUI アプリケーションでは、通信に失敗している場合でもマスター・オペレーターはルート・サーバーを認証できます。この段階で、BigFix 管理者 (マスター・オペレーター) は WebUI アプリケーションにログインし、WebUI を再構成する必要があります。マスター以外のオペレーターがログインしようすると、エラーメッセージが表示され、データベースの接続が回復するまで WebUI にログインできません。

マスター・オペレーターがログインすると、データベース構成テスタースクリーンが表示されます。



注: マスター・オペレーターはデータベース構成をテストし、BigFix Thick コンソールを使わずにそれを保存できます。

関連情報を入力後、オペレーターが「**テスト接続**」ボタンを押すと、WebUI が BigFix Enterprise と正常に通信できるかの検証ができます。

テスト接続でエラーメッセージが返ってきた場合は、以下を確認します。

- データベースと通信するよう設定されているオペレーターが BigFix Enterprise に対する適切な権限を保持していること。WebUI オペレーターは以下の権限を持っている必要があります。
 - BigFix Enterprise での読み取りと書き込み。
 - BigFix Enterprise でのストアード・プロシージャの作成と変更。
 - BigFix Enterprise でのテーブルの作成と変更。
 - BigFix Enterprise でのインデックスの作成と変更。
- SQL Server が BigFix Enterprise の接続に際し、強制的に暗号化するよう設定されているかどうかを確認します。強制的に暗号化するよう設定されている場合は、「**暗号化が有効**」ボタンがオンになっていることを確認します(「暗号化が有効」は詳細構成セクションにあります)。
- MSSQL がデフォルト以外のインスタンスにインストールされている場合は、構成で「**データベースのインスタンス名**」が入力済みであることを確認します(データベースのインスタンス名は詳細構成にあります)。
- 設定されているオペレーターがローカル SQL オペレーターまたはドメイン・ユーザーであるかどうかを確認します。ドメイン・ユーザーでなければならない場合は、「**ドメイン**」フィールドが正しく入力されていることを確認します。

資格情報のテスト後、オペレーターは「**構成の保存**」ボタンを押して、WebUI がデータベースとの通信に新しい資格情報セットを使用していることを確認できます。

変更を反映するため、WebUI サービスを再起動する必要があります。WebUI ログイン・スクリーンはエラーをオペレーターに表示せず、オペレーターはアプリケーションの通常の機能を再開できなくてはなりません。

第 13 章. WebUI および分散サーバー・アーキテクチャー (DSA)

分散サーバー・アーキテクチャー (DSA) での WebUI の動作について説明します。

スムーズな切り替えのための環境設定

WebUI サーバーが BigFix サーバーに直接接続されている場合:

- WebUI コンピューターのクライアント設定で、DSA サーバーをセカンダリー・リレーとして設定します。

プライマリーの BigFix サーバーで障害が発生して、WebUI クライアントがレポートできない場合、通常のリレー選択プロセスでセカンダリー BigFix リレー値を使用してセカンダリー BigFix サーバーが検出され、そのサーバーにレポートが行われます。

- `_BESClient_RelaySelect_ResistFailureIntervalSeconds` の値を下げます。クライアント・システムで指定された設定 `_BESClient_RelaySelect_ResistFailureIntervalSeconds` は、フェイルオーバーのタイミングに影響を及ぼす可能性があります。その値の範囲は 0 秒から 6 時間であり、これにより、クライアントがエラー報告を無視する時間 (秒数) を定義します。これを過ぎると、クライアントは別の親リレーの検出を試行します。デフォルト値は 10 分です。フェイルオーバー構成の場合は、`_BESClient_RelaySelect_ResistFailureIntervalSeconds` (定義されている場合) を小さい値に設定するようにしてください。

WebUI サーバーがリレーに接続されている場合は、『[リレー・フェイルオーバーの構成](#)』の手順を参照し、環境設定を確認してください。

WebUI および DSA

DSA を使用して冗長性を確保し、プライマリー・サーバーに WebUI をインストールしている場合に、そのサーバーで障害が発生したときは、セカンダリー・サーバーを使用して、セカンダリー・サーバーに接続する WebUI の新規インスタンスをインストールする必要があります。

プライマリー以外のサーバーに WebUI をデプロイする場合、WebUI ホスト・マシンで WebUI サーバー設定を使用して、セカンダリー・サーバーに接続するようにクライアント設定 `_WebUIAppEnv_PLATFORM_HOST` を構成します。こうすると、WebUI インスタンスは、マストヘッドで指定されたホスト名を使用するデフォルト設定になりません。

WebUI が独立したサーバーにインストールされている場合は、それをアンインストールして再インストールする必要はありません。

WebUI をプライマリー・ルート・サーバーからセカンダリー・ルート・サーバーに正しく切り替えるには、以下の手順に従います。

1. WebUI サーバーを停止します。
2. 選択した DSA サーバーをマスター・サーバーとして使用するため、切り替え先の DSA サーバーの ID に `masterDatabaseServerID` を割り当てます。『[Linux でのマスター・サーバーの切り替え](#)』を参照してください。

3. WebUI コンピューターで、`_WebUIAppEnv_PLATFORM_HOST` の設定を、切り替え先の DSA サーバーに変更します。
4. プライマリー DSA サーバーで、BESAdmin ツールを使用して新しい WebUI 資格情報を作成し、WebUI 証明書ディレクトリーに新しいキーをコピーします。『[追加の管理コマンド](#)』を参照してください。
5. Fixlet `Deploy/Update WebUI Database Configuration (ID 2687)` を実行し、WebUI の正しいデータベース・サーバー (切り替え後に使用するデータベース・サーバー) を設定します。
6. WebUI サーバーを起動します。

障害が発生した DSA サーバーが復帰したとき、DSA 構成と WebUI 構成の両方を元に戻すには、上記のすべての手順を繰り返し、手順 3 と 4 の間に次を追加します。

- 障害が発生した DSA サーバーと現在の DSA サーバーの両方で、`BESAdmin -revokewebuicredentials` コマンドを使用して古い WebUI 資格情報を取り消します。『[追加の管理コマンド](#)』を参照してください。



注: 現時点では、WebUI の複数インスタンスはサポートされていません。WebUI サービスをマシンに再インストールする場合は、まず WebUI サービスをアンインストールします。

DSA および SAML

BigFix は、DSA 環境で SAML 認証をサポートしています。プライマリー・サーバーに障害が発生した場合は、SAML で有効化する BigFix の各インスタンスを別々に構成する必要があります。例えば、Microsoft Active Directory フェデレーション・サービス (ADFS) では、以下の SAML アサーション・コンシューマー・エンドポイントを定義します。

1. プライマリー WebUI サーバー、プライマリー BES ルート・サーバー、およびプライマリー Web レポート・サーバー (Web レポートを使用している場合)。
2. セカンダリー WebUI サーバー、セカンダリー BES ルート・サーバー、およびセカンダリー Web レポート・サーバー (Web レポートを使用している場合)。

第 14 章. サポートされるパッチ・サイト

WebUI では、BigFix パッチ・サイトのサブセットがサポートされています。

サポートされるパッチ・サイトは、以下のオペレーティング・システムが対象です。

- CentOS
- Debian
- Mac OS X
- Oracle Linux
- Red Hat Enterprise Linux
- SUSE Linux Enterprise
- Ubuntu
- Windows

今後のリリースでは、さらにパッチ・サイトが組み込まれます。

Appendix A. Support

For more information about this product, see the following resources:

- [BigFix Support Portal](#)
- [BigFix Developer](#)
- [BigFix Playlist on YouTube](#)
- [BigFix Tech Advisors channel on YouTube](#)
- [BigFix Forum](#)

Notices

This information was developed for products and services offered in the US.

HCL may not offer the products, services, or features discussed in this document in other countries. Consult your local HCL representative for information on the products and services currently available in your area. Any reference to an HCL product, program, or service is not intended to state or imply that only that HCL product, program, or service may be used. Any functionally equivalent product, program, or service that does not infringe any HCL intellectual property right may be used instead. However, it is the user's responsibility to evaluate and verify the operation of any non-HCL product, program, or service.

HCL may have patents or pending patent applications covering subject matter described in this document. The furnishing of this document does not grant you any license to these patents. You can send license inquiries, in writing, to:

HCL
330 Potrero Ave.
Sunnyvale, CA 94085
USA
Attention: Office of the General Counsel

For license inquiries regarding double-byte character set (DBCS) information, contact the HCL Intellectual Property Department in your country or send inquiries, in writing, to:

HCL
330 Potrero Ave.
Sunnyvale, CA 94085
USA
Attention: Office of the General Counsel

HCL TECHNOLOGIES LTD. PROVIDES THIS PUBLICATION "AS IS" WITHOUT WARRANTY OF ANY KIND, EITHER EXPRESS OR IMPLIED, INCLUDING, BUT NOT LIMITED TO, THE IMPLIED WARRANTIES OF NON-INFRINGEMENT, MERCHANTABILITY OR FITNESS FOR A PARTICULAR PURPOSE. Some jurisdictions do not allow disclaimer of express or implied warranties in certain transactions, therefore, this statement may not apply to you.

This information could include technical inaccuracies or typographical errors. Changes are periodically made to the information herein; these changes will be incorporated in new editions of the publication. HCL may make improvements and/or changes in the product(s) and/or the program(s) described in this publication at any time without notice.

Any references in this information to non-HCL websites are provided for convenience only and do not in any manner serve as an endorsement of those websites. The materials at those websites are not part of the materials for this HCL product and use of those websites is at your own risk.

HCL may use or distribute any of the information you provide in any way it believes appropriate without incurring any obligation to you.

Licensees of this program who wish to have information about it for the purpose of enabling: (i) the exchange of information between independently created programs and other programs (including this one) and (ii) the mutual use of the information which has been exchanged, should contact:

HCL
330 Potrero Ave.
Sunnyvale, CA 94085
USA
Attention: Office of the General Counsel

Such information may be available, subject to appropriate terms and conditions, including in some cases, payment of a fee.

The licensed program described in this document and all licensed material available for it are provided by HCL under terms of the HCL Customer Agreement, HCL International Program License Agreement or any equivalent agreement between us.

The performance data discussed herein is presented as derived under specific operating conditions. Actual results may vary.

Information concerning non-HCL products was obtained from the suppliers of those products, their published announcements or other publicly available sources. HCL has not tested those products and cannot confirm the accuracy of performance, compatibility or any other claims related to non-HCL products. Questions on the capabilities of non-HCL products should be addressed to the suppliers of those products.

Statements regarding HCL's future direction or intent are subject to change or withdrawal without notice, and represent goals and objectives only.

This information contains examples of data and reports used in daily business operations. To illustrate them as completely as possible, the examples include the names of individuals, companies, brands, and products. All of these names are fictitious and any similarity to actual people or business enterprises is entirely coincidental.

COPYRIGHT LICENSE:

This information contains sample application programs in source language, which illustrate programming techniques on various operating platforms. You may copy, modify, and distribute these sample programs in any form without payment to HCL, for the purposes of developing, using, marketing or distributing application programs conforming to the application programming interface for the operating platform for which the sample programs are written. These examples have not been thoroughly tested under all conditions. HCL, therefore, cannot guarantee or imply reliability, serviceability, or function of these programs. The sample programs are provided "AS IS," without warranty of any kind. HCL shall not be liable for any damages arising out of your use of the sample programs.

Each copy or any portion of these sample programs or any derivative work must include a copyright notice as follows:

© (your company name) (year).

Portions of this code are derived from HCL Ltd. Sample Programs.

Trademarks

HCL Technologies Ltd. and HCL Technologies Ltd. logo, and hcl.com are trademarks or registered trademarks of HCL Technologies Ltd., registered in many jurisdictions worldwide.

Adobe, the Adobe logo, PostScript, and the PostScript logo are either registered trademarks or trademarks of Adobe Systems Incorporated in the United States, and/or other countries.

Java and all Java-based trademarks and logos are trademarks or registered trademarks of Oracle and/or its affiliates.

Microsoft, Windows, Windows NT, and the Windows logo are trademarks of Microsoft Corporation in the United States, other countries, or both.

Linux is a registered trademark of Linus Torvalds in the United States, other countries, or both.

UNIX is a registered trademark of The Open Group in the United States and other countries.

Other product and service names might be trademarks of HCL or other companies.

Terms and conditions for product documentation

Permissions for the use of these publications are granted subject to the following terms and conditions.

Applicability

These terms and conditions are in addition to any terms of use for the HCL website.

Personal use

You may reproduce these publications for your personal, noncommercial use provided that all proprietary notices are preserved. You may not distribute, display or make derivative work of these publications, or any portion thereof, without the express consent of HCL.

Commercial use

You may reproduce, distribute and display these publications solely within your enterprise provided that all proprietary notices are preserved. You may not make derivative works of these publications, or reproduce, distribute or display these publications or any portion thereof outside your enterprise, without the express consent of HCL.

Rights

Except as expressly granted in this permission, no other permissions, licenses or rights are granted, either express or implied, to the publications or any information, data, software or other intellectual property contained therein.

HCL reserves the right to withdraw the permissions granted herein whenever, in its discretion, the use of the publications is detrimental to its interest or, as determined by HCL, the above instructions are not being properly followed.

You may not download, export or re-export this information except in full compliance with all applicable laws and regulations, including all United States export laws and regulations.

HCL MAKES NO GUARANTEE ABOUT THE CONTENT OF THESE PUBLICATIONS. THE PUBLICATIONS ARE PROVIDED "AS-IS" AND WITHOUT WARRANTY OF ANY KIND, EITHER EXPRESSED OR IMPLIED, INCLUDING BUT NOT LIMITED TO IMPLIED WARRANTIES OF MERCHANTABILITY, NON-INFRINGEMENT, AND FITNESS FOR A PARTICULAR PURPOSE.